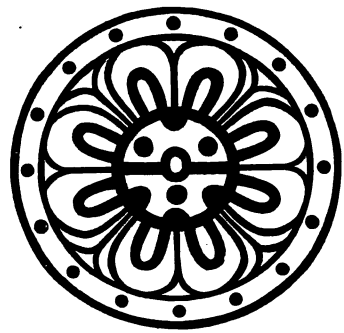
（川口　勇書）

会誌名「層富」(そほ・そふ）の由来

私たちが住んでいる平城ニュータウンの地域は，古代には「層富」または「曽布」「添」とも記され，「倭六県」(やまとのりくのあがた）の一つでありました。出典は『日本書記』の神武即位前紀己未年の春２月壬辰朔辛亥（20日）の条にみえる「層富県」によりました。

題字もはじめ小さく，あと大きくしましたのは皆様の将来と本会の末広の発展を願ったものです。

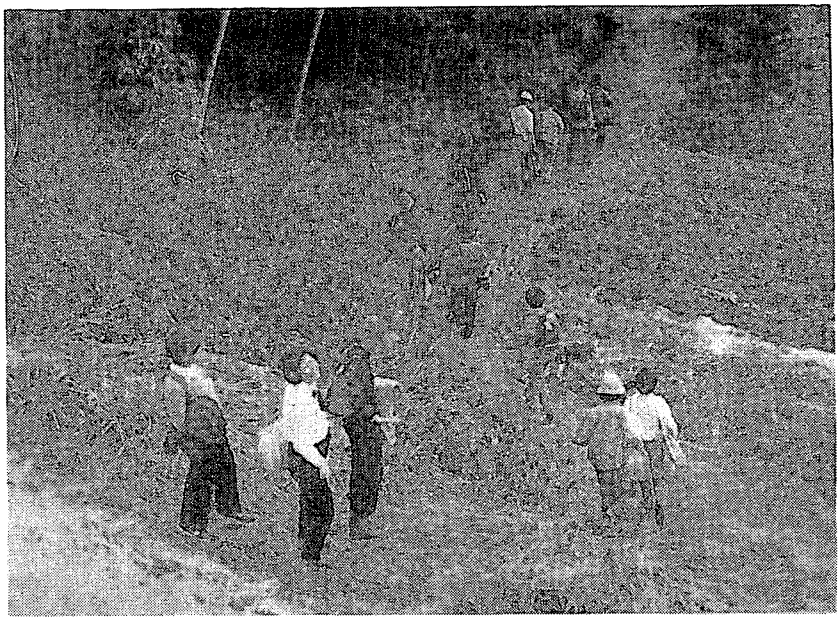
古代大和の由緒ある地名を理事会の賛同を得て会誌名としました。ご愛顧の程を。　　（網干善教）



会　章

平城ニュータウンの「平」と文化協会の「文」を上下に組み合わせ，単純な円形にまとめ，音如ヶ谷瓦窯跡から出土の古代軒丸瓦の中央部分に配置したものです。蓮華の中の埴輪の顔のようにも，二人三脚で楽しんでいるようにも見えます。

（基本デザイン　朱雀・筧　裕）



ハイクをかねて北山の辺見学　（60年３月16日）

「層富」第２号目次　1985年９月

はじめに……網干　善教……①
「声の図書館」と「古代の響き」……吉野南美子……③
奈良筆に生きる……苅谷　史峰……孝田　有禅……⑦
木に思いを寄せて……真鍋さとみ……⑨
短歌「明日展く」……左門　璃晃……⑪
俳句……牧野　春駒……⑮

講演（要旨）
古代と現代……網干　善教……⑳
成人病の子防について……澤田　恂……㉕

華やか第２回文化祭……㉚
グループ活動状況……㉟
よりよい文化協会へ総会……㊸
60年度役員、59年度会員名簿……㊺

はじめに

朝日新聞の山下販売店さんが編集、発行されている「コミニテー高原の原」の三月号に次のような記事がありました。

学校の育友会や町内の自治会の会合などに行くと殆んどが母親や女性で、たまたま参加した主人はたまげて、帰ってくるなり、奥様に向って「これから君が行け」といった。「勤め人の多い平城ニュータウンでは仕方がないが……」といった内容でした。

その記事を読んで思ったこと。一つは、それならばもっと女性の方は社会的訓練をしてもらわなくてはいけない。例えば会議のすすめ方や討議内容、判断力などを高めてもらわなくては社会生活が低下するのではないか。第二にそうした会合が奥様まかせでは男性は無責任すぎるのではないか。「男は忙しい」「たまの休みだ、ゆっくりと」という情況や気持はわからないことはないが、十回の会合に一回も出席できないということはないだろうし、男性の出席者が殆んどないというのも問題である。要は行ってやろうという意志の有無だろうと思う。そこには行ったって何のメリットもないだろうとか女が適当にやっておけばそれで足りるという安易な気持があるのではないでしょうか。

メリットがないから行かないというのではなくて、行ってメリットを作るように努力しようという積極的な意志があるかないかの問題だと思います。

私も学校の教員になってからすでに今年で三十六年になります。その間、子供たちも大人にもほ

んとに多くの人たちに接しました。なかには自分の勤めている会社のことだけやその周辺のことだけしか話題がない人もいました。その反対に、忙しい時間をやりくりして、積極的にいろいろなことを御世話して下さる人もおられました。献身的にみんなの利益のために努力して下さる人もおられました。人それぞれに生き方があると思ったし、その人の信条に敬意の気持をもったこともあります。

平城ニュータウン文化協会は、そこに住む人たちにとってすばらしいコミニテーづくりの場でありたいと願っている一人であります。そのように考えて下さる人たちによって、二年間細々ながら活動してきました。そのために御迷惑をかけたことや御無理を御願いしたこともあったと思います。反面、批判的な人や全く無関心な人も多いのも事実であります。

しかし、本会の目的やその活動に何らかの形において参加して下さっている会員は決して誤った行為をしているのではないことは確かでありますし、少くとも私たちには打算的な考え方や野心的、恣意的なものはないと断言できます、だとすると文化協会の理念を消滅させるわけにはいかないと思います。それがたとえささやかなものであったとしても——。

地域社会の発展のためにスポーツ活動も、教育活動も、文化活動も、それぞれの理想を掲げて手をつないでしっかりやりましょうというのが私の今の信条であります。

平城ニュータウン文化協会

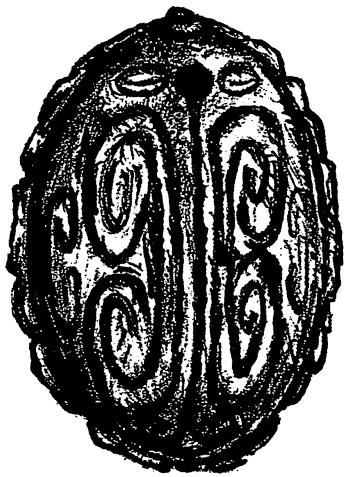
会長　網千善教

「声の図書館」と「古代の響き」

吉野　南美子

奈良県立橿原考古学研究所付属博物館協力、奈良県盲人福祉センター「声の図書館」製作の「音の考古学」+「古代の響き」という視覚障害者を対象にしたテープ（九〇分）が、マスコミにとりあげられましたので、その製作に係った者として何か書くようにと編集部よりお話がありました。

（盲人福祉センター（以下センターと省略）は、視覚障害（全盲、弱視）者の福祉、生活一般についての援助相談を行う所ですが、現在は各地区の福祉事務所がその役割を担っているので、奈良の場合は「点字図書館」、「声の図書館」としての働きが主なものとなっています。本を点字に直し点訳図書にしたり、音声化して録音（テープ）図書にする仕事はボランティアによって行なわれています。私は音声訳のボランティアですから「声の図書館」に携わっているわけですが、たとえば三浦綾子さんの「藍色の便箋」（二四〇頁、四―六版）は、テープにすると九〇分テープ五本位になります、自宅でオープンテープレコーダーを使って録音しマザーテープを作る所までをボランティアがします。センターでは貸出し希望があるとマザーテープからカセットテープにダビングしたものを特別なケースに入れ、郵送で貸出します。送料は郵便法で無料になっています。聞いたあとケースの宛名カードをひっくり返すとセンターの住所が印刷してありますから、ポストに入れてもらえば戻ってきます。マザーテープは常にセンターに保管されていることになり「声の図



（幕前・カメ型土製品）

書館」では、このマザーテープを「蔵書」と呼んでいます。

図書館には本だけでなく、あるテーマにそって切り抜きや写真やパンフレットなどを集めてファイルしたその図書館独自の自館製資料と呼ばれるものがありますが、「古代の響き」のテープは、その類いのものと考えていただいてよいと思います。ご記憶の方もいらっしゃると思うのですが、五七年秋、橿原の博物館で「音の考古学」・「古代の響き」という特別展があり、音の出るもの、音を出す目的で作られたと思われる出土品がたくさん展示され、「音」をテーマにしたユニークな特展と話題になりました。その時、実際に音の出るものは音楽家の上杉紅

（後谷・土笛）

童さんが試されテープに録音されました。今回の私達のテープはこの時のテープをもとにして、他に私達で集めた音、博物館の岡崎晋明主任学芸員の説明などを加え、二年程かけてのんびり製作したものです。

内容は「縄文時代」……。埼玉県後谷遺跡の土笛、岩手県幕前遺跡のカメ型土製品、岐阜県東乙原遺跡の石笛、鳥取県目久美遺跡の石笛？について、秋田県出土のヒスイの笛、能管との比較、岡崎氏のこれら出土品の用途についての解説、東京ナラ原遺跡の音の出る土偶、宮城県里浜貝塚出土の鹿の角製のキジ笛（複製）、硬い鹿の角を石鏃で簡単に削る方法「弥生時代」……。陶塤（ヒョウケン）（複製）、柴田南雄著「日本の音を聴く」より「弥生の土笛」の朗読、陶塤についての説明（特別展の時のカタログより）参考音ー。清代の陶塤とヤシの実の塤、銅鐸（複製）、弥生時代の特徴と銅鐸について岡崎氏の解説、岡山市ノートルダム聖心女子大キャンパス出土の鳥の形をした土笛、琴の為のプロローグ「古事記」より「根の国の冒険」（福永武彦訳）の朗読、福岡県辻田遺跡出土の琴（複製）

「古墳時代」……鈴に因んで万葉巻十七、四〇一一、

タカ狩の歌の紹介、大和文華館の「ハニワタカ狩男子像」について―同館の村田靖子学芸員、鈴鏡、三環鈴、馬鐸、法輪寺の風鐸、岡崎氏のまとめ、参考音―中国湖北省、曽侯乙墓出土の編鐘（●印博物館よりいただいた音）

岡崎さんにはセンターの録音室に来ていただき、私が書き博物館でチェックしていただいたシナリオ?通りに、俳優さんよろしく解説していただきました。難しかったのは色々な形をした出土品を言葉、文章で表現することでした。あらかじめ紙粘土で複製を作っておき、センターの視覚障害の職員岩井さんに、まず文章表現を聞いて形を想像してもらいます。次に複製を手渡して想像通りかどうか確かめてもらうという方法をとりました。

ひとつひとつの音集めに色々な思い出が重なるのですが……。天理参考館では天理教の方のツテでやっとカメ型土製品とよばれる二〇cm程の楕円形で背中に大洞（オウボラ）式の入組紋のついた出土品を吹かせていただいたのですが、なかなか音が出ず大汗をかきました。ボーッという低い音でした。?のついた目久美遺跡の石笛については、「西日本で初の石笛」と新聞に大きく出ましたので、現地に出かけたのですが住居跡からではなく、海水面下の二次堆積包含層から出土したものなので笛とは考えられない新聞記者の〝いさみ足〟（発掘担当者談）ということでがっかりしました。ノートルダムの鳥型の笛の場合は反対にとてもうまくゆきました。新聞で知ってお願いしたのですが、発掘担当者の方がフルートの専門家に吹いてもらった音を送って下さいました。素人では音が出なかったのでしょうか。またどこにどんな音があるのかを知るため図書館で本を読んだりしたのですが、石巻市在住の楠本政助氏の「実験考古学入門」は大変面白く参考になりました。氏からは御自身鹿の角を削って復元された縄文時代のキジ笛の音をいただきましたが、臨場感演出の

（東2原・石笛）

ため？わざわざ山に出かけ録音して下さいました。辻田遺跡出土の弥生の琴を修猷館高校生が復原し、その演奏がＮＨＫで放送されたというのも本で読み（前出「日本の音を聴く」）、お願いの手紙を修猷館に書きました。演奏できる状態で出土した琴はないからです。行方不明になっていた琴を捜し出し当時（五三年）の生徒さんを集め、サクラサクラを収録したテープを送って下さった安武先生は、右眼失明、左眼も強度の近視、さらに糖尿病で失明の恐れがあるという方で、教務主任という激務の中、御不自由なお体でと感謝でいっぱいです。古墳時代は鈴（銅製）がとても愛用された時代です。万葉にタカ狩の歌がありタカにも鈴をつけたらしいのです。そこで大和文華館のタカ匠ハニワのタカにも鈴がついているかどうか……。視覚障害者は「さわる」ことを「見る」と云いますが、センターの岩井さんが「見て」確かめる様子をテープにとりたいと、文華館にそっとさわらせていただけないかとお願いしました。一度は許可が出たのですが、やはり重文だからと実現せず学芸員の村田さんにハニワの前で説明していただく形にしました。常設ではありませんので収蔵庫から出して間近かに見せていただいたのですが、そののどかなおおらかな表情をしたハニワに見とれ感動し心をうたれ、さわれない理由もよくわかりました。同時にこのハニワのすばらしさを視覚障害者に何とかして正確に伝える方法はないものかと大変もどかしく思いました。

（ナラ原・音の出る土湯）

テープの最後に参考音として北京大学に留学している飛田さんからいただいた編鐘の音ー「竹技詞」ーという曲を入れました。五七年冬の新聞に紹介されていたものですが、大小の釣鐘を六五個組み合せたこの打楽器は二千四百年前の宮廷楽器です。音階も整い「第九」の歓喜の合唱なども立派に演奏できるそうです。その頃の日本はまだ石笛、土笛の時代、カルチャーショック「大」でした。

―語り部　第一話―

子どもたちに　郷土の人々に
この人のことだけは
ぜひ　語りつたえたいと思い
筆をとりました

奈良筆に生きる

苅谷史峰
奈良市立平城西中学校
校長　孝田　有禅

史峰の住むここ福智院町は、古い奈良町の屋並みを、今に残す静かな町である。

仕事場と居間と土間、小さな長屋の一室で、史峰は、黙々と筆の穂先きをそろえていた。

その時、一通の見なれない手紙が舞いこんできた。

―奈良筆づくりの手法を中国筆のモデルにしたい。あなたの仕事を取材させてほしい。

―中国　北京放送局

「ええっ、筆の本家の中国が、私の筆づくりを学びたいって、これはどういうことだ。」

驚きと不安と喜びとに包まれた史峰は、心が静まると、家族とともに、仏壇の前に座った。

そこには、両親と史峰を育てた筆づくりの師匠の位はいが並んでいた。

手紙を供え、静かに合掌する史峰の指先きが、心なしかふるえていた。

史峰の本名は正二といった。三才で母を亡くした正二は、養子にもらわれていった。

六才の時、不幸にもひざの関節炎がもとで、右足が「く」の字に曲ってしまった。どこに行っても曲った足をなじる言葉が正二に浴びせられた。小学校を五年で中退するまでに、五回も転校した。

「どこか足が悪くても働かせてくれる所はないか。」

さがし求めて来たのが、奈良の筆職人の家だった。

「おまえは、足が悪いから座って仕事をしようと思ってきた。そんな根性では筆づくりはできない。杖を離して歩け。」

師匠は、厳しかった。店回り、運ぱん、毛皮からの毛のかりとり、毛もみ（毛の油ぬき）など一日中仕事に追いまくった。筆づくりは、いっこうに教えてはくれなか

った。
寒い冬、痛む足をひきづり吹雪の道を歩くとき、何べんか涙と鼻じるをぬぐった。
―よし、これから兄弟子のように座ってやれる仕事には、とことん座り込んで仕事をするぞ―。
正二は、座ってできる綿抜き、毛寄せなどのできる日を夢見た。一年たってようやく、筆づくりを許された。
正二は、兄弟子に教えてもらい、やっとできた筆を師匠にさしだした。
「こんな筆で字が書けると思うのか。」
師匠は、せっかくの筆を、くずかごにほってしまった。何回やり直しても「よし」とは言わなかった。
ある日、正二は、筆屋の店先きで、書家のことばを耳にした。「このごろの奈良筆は質が落ちた。四、五へん洗うと筆の穂先きが狂ってしまう。」「この筆は、習字もしない職人が作った筆だ、ぬけ毛が多いことがわかっていない。」正二は、そのことばにどきっとした。自分のことを言われていると思った。
それから正二は、習字と読書に努めた。小学校五年までの学力では、あまりにも未知な文字やことばが多かった。しかし、彼は、誰かれかまわずたずねまくった。
五年、十年、ようやく筆職人として独立した正二は、かつて耳にした「奈良筆の質が落ちたこと、使う人の身になっていない。」ということばを、製作の柱にした。
史峰と名をかえた正二は、奈良筆古来の伝統をさぐりあらゆる動物の毛の特性を確かめ、書体に応じる筆づくりを研究した。量産できる安い筆は工賃が得やすい。史峰の筆は、一本一本に心をこめるため、収入は少なく、家計は火の車だった。顔のうつるおかゆで、三日も四日も食いのばし、腹をすかして泣く子を背負い質屋へ足を運んだ。「史峰の筆は、使えば使うほどよく書ける。注文どおりの筆を作ってくれる。」いつしか史峰の名は、全国の書家に響いた。
筆づくり六十年、史峰にとって心晴れぬものがあった、それは、筆づくりの後継者がいなくなることだ。息子も他の仕事についてしまった。史峰は、「このままでは、奈良筆の伝統が絶える。」伝統工芸後継者養成について走り回った、その願いが実のりはじめた。若い婦人が筆づくりに集まりはじめたことだ。
奈良新聞の遠雷というコラム執筆者となった史峰は、

奈良筆のねうち、日本人の心を残す筆について説いた。

「職人は、金もうけを考えたらあかん。仕事で勝負すること、反省と工夫、そのくりかえしが職人や。職人には年令はありまへん。燃えつきるまでやること。」

史峰は、訪れる人みんなに信条を述べつづけた。

昭和五十五年十月、東大寺昭和大修理完成大佛開眼の大筆を清水管長より頼まれた史峰は、歴史に残る筆、自分の筆づくりの全力を投じた。

清水管長の手にもつ筆が、おごそかに大仏の眼前に大きく円相を画いた。管長は、史峰に感謝の色紙を贈った。

「一を以て之を貫ぬく」

これは、自ら志ざした仕事に生涯を貫ぬこうとする史峰そのものの人生を写したことばであった。

史峰は、仕事場にかかげたこの書を見上げながらつぶやく。

「わたしは、まだ青二才や、もっと、もっとがんばらんことには」

（昭和五十八年九月十六日逝去）

木に思いを寄せて

真鍋　さとみ

某研究所の裏山の芝に寝ころんで、空を見ていた。初夏の眩しい太陽は、砂漠でラクダと共に寝起きするベトウィン族に、してしまいそうだ。自然と共に生きると眩き目をとじると古代へ。何千年の昔も今と同じように、白い雲が流れ、青い空の下には、うっ蒼とした森が有り古代の人々が木を切り、木から弓を作り、鍬を作り、鋤を作り、臼を作り、修羅を作り……。

古代遺物の保存処理という地味ではあるが有意義な仕事は、この半年ばかり、私の生活と頭の中を独占している。日本各地から発掘され、土や泥のついたままで、研究所に運び込まれた木製品の遺物を、筆で、そっと洗うと、遺物は、目前に、当時の姿を顕にする。それらは、欠けたり、ほんの一部分であったりするけれど、石で削った跡、土人のノミの跡をくっきりと残している。「木は

二度生きる。」というが、遺物は、美しい木目を持って、三度、生きる。水の流れに、ボロボロと表面が崩れ落ち朽ち果ていこうとする遺物さえ、まだ執ように、形を保とうとするようだ。千何百年も、土の中で、生き続ける木に、人間の生命の微々たる事を思い知らされる。

古代の人々は、実に上手に、身近な木を使いこなす。「日本書紀」の素戔嗚尊の説話に、「……ヒノキは宮殿に、スギとクスノキは舟に、マキは棺の材に使え。」とある。カシノキのように、丈夫で堅い木は鍬や鋤に、丈夫で弾力性のあるカシ、カヤ、ヒイラギは弓に、木の組織が交錯して、たてに割れにくいクスノキやケヤキは臼に、大きな木のスギ、クロマツは舟に。最近、保存処理が完了した鳥浜貝塚出土の縄文後期の丸木舟もスギノキだ。シイノキ、カシ等の雑木を水田開発に使う杭に、コウヤマキは棺材に、一説に言う「金比羅、舟々、おいてに帆かけてシュラ、シュシュシュのシュラ（修羅）？は、アラガシの木だ。

出土木製品には、これは何だろう、何を作るつもりだったのかと考えさせられるような、単に、加工材と呼ばれる遺物も少なくない。木が目的物に合わなかったのか、失敗作なのか、作っている最中に止めざるを得ない事件が起きたのか、遺物は、当時の出来事を静かに語る、が勉強不足由に、まだ、遺物の語りかけに私は、答えきれずにいる。多くの貴重な資料を、無駄にする日々が続いている。古代人の生活を、ただ垣間見るだけだ、と同時に森や林が、住宅地にかわる現在と木と共に生きる古代、古い木製品は保存され、新しい木は、無雑作に切られていく今日とのあまりのギャップを知らされる時、憔悴の念にかられる。木と仲良く生きたいものだ。

歴史は全てを証明する。歴史は真理を証明する。と、ある偉大な政治家は言った。ただ歴史の中を生きた一般庶民の生き様を知りたいと思っただけの私に、歴史は、遺物は、大きな課題を与える。この日本に、数少なくなったというコウヤマキの木が、残っているうちに、答えの門戸にでも、たどり着けるのだろうか。

短歌

明日展く

左門璃晃

ことごとく葉をふり捨てし清しさに銀杏の梢より月光とどく

ひとつらに御堂も人家も雪かづきいま唯心の浄土を現ず

万有のゆかりか雪は荘厳に降りつつ人の生死わかたぬ

乾きたる地表踏みゆく足下より春の原野につづける錯誤

汝が抱く原野はいづく裸木に鳩ふくらみて遠くを見つむ

いかなる明日展くを見むか双眸に冬の夜霧のいたく沁みつつ

ほとほとと冬雨の音聞く夜半の自問自答を人に知らゆな

ばかばかしき画一化の現代かかはらず土筆さわらび美しく調ふ

あまづたふ日輪の下ひたぶるの生命を生かす星ぞけがすな

森羅万象うつくしく生くるこの星を原水核にけがすか人間

待春

大浦　小枝子

指先の痛みはただの皮膚と言ひ聞かせつつ針仕事する
福寿草のつぼみ出でぬを待ち焦がれ枯枝折りて凍て土を堀る
現身の省みるべき刻なきを野辺のすみれのゆかしさに羞づ
耳遠き老に話せる大声を叱咤と思ひしか人の振り向く
一昨日も遇ひし野良犬にやらんとてパンをしのばせ寒風に出づ

大地ふみしめ

岡田　越子

わが歩みのろまでもよし牛のごと大地ふみしめ強く生きたし
ひらひらと傘にとまりてぬれしままさくら花びら持ち帰るなり
忘がかれし竜野の桜ゆかりあり忘れし人を思ひ耽ぢらふ
南禅寺の僧の彫らしし小面の静けき笑みに妖気ただよふ
わが乗れる電車は山間を通り抜けあかねの空を追ひつつ走る

白き町

木庭　和子

友の家の其処に建てるを知りてより白き町並あたたかく見ゆ
固き実の花梨に秘めし芳潤の深きあじはひ友にかも似る
高照らす皇子のおくつきいづれにや凝灰石の切石よ告れ
胸ぬちに深く射し入る陽光あれ春の愁ひの色あせるまで
町角に夕餉の匂ひながれきぬおだしき一日か星も光りて

直ぐなる心

木村　澄子

花壇にて犬鼻先に土のせて手伝うごとく穴を掘りおり
「おしゃべりマシーン」と云われし幼き日のありぬ教職に就く娘を今朝送り出す
五月晴れ真夏日のごと吉野路はかおれる木々よ流れる雲よ
五月晴れ緑かおれる吉野路の木々に誓いぬ直ぐなる心を
すぎこしのあさはかなるを耽じらいつつ研ぎて行かんやこれからの日日

朝化粧

久門冨美

霧こめて未だ明けやらぬ瀬戸入江に白鷺かなし首かしげ立つ

砕け散る飛沫も凍るかの千島亡夫終焉の地にわれ立たしめよ

日だまりの筵に小豆を選びゐる老夫婦見つつ亡き夫恋し

道祖神にふかし芋二つ供へあり梅花薫る佐保路のほとりの

朝化粧つやめく弥生少し濃くわがさす紅の色もはずめり

素心蘭

栗本文枝

斑雪に水仙咲けり隣家の孤老は病みて開かぬ窓下

一茎の素心咲きたり裏山に息の採りて植ゑし鉢の春蘭

朝日影に霧晴れゆけばかぎろひて咲き静もれる桜花みゆ

中庭の椅子によりつつ夜の更けを語れば近き星の瞬き

二上山は蒼ほの暗き空にあり目眩めく入日にわれを佇たせて

春のぬくもり

小池久子

いそぎゆくつまさきとめてふと見れば誰が摘みすてしたんぽぽのかお

ぬくもりのつたわるごとく夕やけのあかあかあかとひとり遊びて

春の空かすみか雲か今朝のもや心まよいて夫を待ちつつ

道ばたの少しふくらむ木瓜の花歩むわが身にほほえみかける

年の暮さげてかえりし葉ぼたんのおどりぼたんと名をかえし春

造幣局通り抜け

永田喜一郎

花吹雪ほほにふれふれ通り抜け花人の流れ紅手毬に集る

咲き競ふ珍種そろへる桜花の道はああ大阪やなあ通り抜け

「手を引かん亡妻見に還れこの花を」の句に涙せり通り抜けの道

明治大正昭和に生きて通り抜け大阪よいとこ花匂ふ道あり

吹きだまり花むしろのごとし通り抜け腰を下ろして憩ふ人びと

老を彩る

東堀　きみえ

散る花の浮べる川に芹摘めば菜の花里に霧の流るる
い寝がての夜半降る雨の音頻し過ぎこし日日に心遊ばす
木木芽ぶく庭に朝日は輝きてホースの水の虹を描ける
独り居の心自由に過ぐる日日つたなき短歌も老を彩る
青春に穿きし袴の色あせてその思出の時は還らず

ひとつらの野火

宮川　恵美子

ささ百合の貌かぼそき花蕊よりつと蜂とび出で夢かき消ゆる
散り果てし銀杏並木も研がれゆく蒼天ぬきて冬への沈黙
一面に野火の煙のたゆたへり奇に静けき多武峯の径
ブルドーザー操る男の瞳は光りマスコット人形はげしく揺るる
削られし山裾に傾くクレーン車の冬の星より寒き灯火

小さきもの

山元　洋子

七才の身丈を不足と思うらし爪先き立ちて吾子はもの云う
あかね色に萠え出でんとする宮跡にいざ来て遊べ子らも仔犬も
朝ごとに出会いしかたわの小雀よ無事に生くるや今日は会わざり
朝々に集会あるらし雀らは四時四〇分にひとしきり鳴く
いかばかり苦しき生を負いいるやあわれ野良猫の目のするどさよ

俳句

牧野春駒

七堂を距つる雨や牡丹の芽

餅となる前の蓬の深みどり

畦塗って水口の辺は手で撫づる

神の井に映りて花を終ふる藤

鮎を釣る竿のあなたの一禅寺

木曽馬の蔓喰む歯音きこゆなり

楠の洞より発たす神もあり

蓑虫の萩の葉ばかり鎧へるも

禰宜病んで俵に残る桜炭

雪吊の縄ゆるびたる慶事あり

三井　サチ子

恋猫の雨に打たれつ塀際に
蕣ひの家梅に日のうすうすと
花の友足を延ばして訪ひきたる
長靴の片足塀に松手入
寒に入る近江の名菓届けられ

永谷　秋乃

束の間の日当り大事鉢の梅
酒蔵に家紋大きく鯉幟
夕蛍墓碑の一字を照らしけり
焼印の下駄に萩散る露天風呂
身ほとりに大辞典置き冬篭

西山　佐代子

山焼をはるかにおきし厨窓
飾りつぎ帷子あせしひいなかな
釋尊はさかさにおはす花まつり
腰おろす暗峠山すみれ
筆とりて阿弥陀の前や菜種梅雨

永原　寛子

二月の熱ある肌に香水を
流れ来る花に手をのべ舟あそび
蝶とゐて一人きりなり秋耕す
月を待つ丹後の絹に手を通し
木枯の鹿うづくまる巌のごと

木村長子

遠目にも夜の梅白き百姓家
鳥雲に生涯田舎教師たり
メーデーの終りし雨の東寺かな
よき時に死に給ひしと墓洗ふ
男下駄揃へて萩の枯るる家

柏木一枝

薄氷の音のきこえし濯ぎもの
梅雨に入る十兵衛茶屋のとろろ飯
くすり草伝ふる村の青田かな
バスを待つ時間短し秋の山
柿熟れてそろそろ孫の来る頃か

廣田春

花菜垣まはり道して萬福寺
八十のいのちを夏の山に来て
秋晴や墓に詣りて夫に告ぐ
隣家の留守の鎧戸法師蟬
葉牡丹の紅白とどく吉野より

喜多まさ

降りやみてゐしがまた降る桃の花
春泥に脱ぎたる下駄の裏返る
庭の外まで鶏頭の生ひ出でて
由緒説く尼僧の顔に冬日さす
逝きし子に今日も賀状の届きたる

川口シズヱ

水仙に西の海より風強く
入学の祝ひに老は朝早く
秋茄子の終りの一果夫の膳
秋晴の日を違へ来し歯科の門
莖漬けて一事を胸に秘めてをり

中村君代

病み臥して盆梅いつか咲き満てる
誕生の祝は寝巻梅の花
友の病む窓に秋立つ千羽鶴
コルセットつける時間を法師蟬
末枯に猫の形身の首輪あり

森村和枝

薄氷の解けてゆくなり溝掃除
水仙を生けて香炉を片付くる
春めきし流れに指を立てて見ぬ
柿食べて思ひ出のなき祖母なれど
無花果の実の落ちたるに雀蜂

亀沢浦子

遠くより見えて桜の吉野山
ベランダの鉢植苺蚍のきて
ふるさとの蜜柑にそへて便りつく
暖房のバスの窓辺に夕日映ゆ
冬日向バス待つ人を残し去る

牧野和代

おのがじし反るかき餅や春の雪
凍鶴に青き葉まろび出でにけり
一駅を乗り合はせたる春の雪
蕨や石室に湧く智恵の水
一条の葱石段に禅寺かな

牧野友美

竹を伐る音とよもしぬ茶筌村
目貼して激しくなりし夜半の雨
寒釣の大声交はすときのあり
花茶垣くずれしところ裏鬼門
水分の山よりきたる盆の槙

六十年度総会記念講演（要旨）

古代と現代

―ある歴史上の人物の人生観をめぐって―

網干善教

(一)

今日の演題は非常に抽象的な表現で、一体何の話しなのか見当もつないものでありましょう。私自身も急に講演をすることになりましたので、内容がきまらないまま題をつけましたので、こういう抽象的なものになってしまい、甚だ後悔しています。

ところで私は「歴史」に非常に興味をもち、今日まで研究生活を送ってきましたが、私の歴史に対する興味は全く異った二つの考え方が同居しているのです。一つは人間の欲望の葛藤の現われる歴史というものは非常に主観的となるから、血生臭いものをさけて、考古学のようにあまり個人的な問題ではなく、むしろ文化史的な面を自分の研究分野としたいという考え方と、他方ではある事（事件でもよろしい）に遭遇したとき、その当事者たちが、どのような考え方、生き方をしたかということすなわち先の目的と全く相反する二面に興味をもっているのです。今日はこのうち後者の方について話をしたいと思います。

歴史上ある人物というのは飛鳥時代に生きた蘇我倉山田石川麻呂、その子供たちである興与ら三人の男兄弟、ある女（名前不明）遠智娘ら女兄弟、そして天智天皇とその娘であり天武天皇の皇后になり、後に女帝となった持統天皇ら、古代史上有名な人たち。この人たちが「山田寺の変」という事件のなかで、人生とは何であるか。何をなすべきかを考え、そしてどのような運命のなかに生涯を果てていったのかという点であります。全体的にみれば、それはまさしく「悲劇」に終始したのでありま

すが、そのなかでの人それぞれの生き方。事実は「古代」の出来事でありますが「現在」の世に生きる私たちからみればどう理解できるか。今日は『日本書紀』に書き記されている記事について説明し、皆様が今日的な立場で何かを感じてくだされば と思います。

ところで「山田寺の変」という山田寺とは、飛鳥にあります古代寺院ですが、今は全く建物が残っていませんでして、ところどころに礎石がある程度で、先年来の発掘調査によって、その様相がだんだんわかってきました。特に、一昨年から昨年にかけて、東面回廊という部分の発掘が行われ、柱など建物の各部分が当時のままの姿でみつかり、大きな話題となりました。皆様のなかにもこの山田寺跡あるいは山田寺の発掘調査を見学された方もおられると思いますが、ここで起った悲劇、それを知って行かれるのと、何も知らないで行くのとは大きな違いだと思います。皆様の御希望があれば文化協会でも是非一緒に見学に行きたいと思っている場所です。期待していて下さい。

(二)

さて、次のようなことが『日本書紀』の皇極天皇三年の条に書いてあります。

「中大兄皇子が飛鳥寺の槻の木の下で蹴鞠の会を行っていたとき皮鞋が脱げ、それを拾った藤原鎌足が差し出し、ここで中大兄皇子と藤原鎌足が知り合った」

これは有名な話で、皆様の中には学生の頃、学校で習われたと思います。話は続きます。

その後中大兄皇子と鎌足は、相談をして蘇我入鹿を殺し、大化改新を行うことになりますが、二人の間で、このような大きな仕事をするためには、信頼できる仲間がいることが必要だ。その人物として蘇我倉山田石川麻呂がよい。倉山田石川麻呂を味方にするのには、彼の娘を中大兄皇子の妃にするとよい。ということで倉山田麻呂に申し出ます。話がまとまり、いよいよ結婚することになりますが、最初の夜、新妻が連れ去られます。略奪した男は倉山田石川麻呂の弟である日向（ひむか＝身刺＝むさしともいう）であります。そこで娘の父であります倉山田石川麻呂は途方にくれます。その時、妹である遠

智娘（おちのいろつめ、造媛「みやっこひめ」ともいいます）が、自分からすすんで姉の身代になって中大兄皇子の妃となります。

その翌年の皇極天皇四年の六月八日になって、中大兄皇子は、倉山田石川麻呂に蘇我入鹿を殺して新しい政権を立てることを告げ、三韓から貢物をもってくる十二日に上表文を読む任務を与え、その席に参列している入鹿を鎌足らによって殺すことを伝えます。こうして入鹿は殺されますが、倉山田石川麻呂は中大兄皇子側の腹心の味方であります。

そして大化改新によって、新しい政権ができ、倉山田石川麻呂は右大臣に任ぜられます。ところが山田寺の事件というのは、その四年後に起るのです。『日本書紀』大化五年の三月の条には次のような記事があります。

(三)

三月十七日、阿倍大臣が薨じました。阿部大臣は左大臣で最高の地位にいました。右大臣は倉山田石川麻呂でした。当然、倉山田麻呂の昇任が予想されます。そして三月二十四日になりました。阿部大臣の送葬も終ったことでしょう。倉山田石川麻呂の弟で、先に中大兄皇子の妃となる予定の娘を掠奪した蘇我臣日向（身刺）が中大兄に対して「兄の倉山田石川麻呂はあなたを殺そうという計画をもっている。それはかなり以前からの計画らしい」と密告したのです。―本当は讒言（ざんげん）といって、いつわって他人をあしざまに言ったのです。そこで中大兄皇子は倉山田石川麻呂の下に使者をたてて真偽を確めるのですが、倉山田石川麻呂はそういう重大なことは自分が直接お逢いして返事をしたいといいます。中大兄皇子側は、もう一度、使者をたてますが、やはり同じ返事だったので、軍隊を派遣して攻めます。これは大阪の難波宮での出来事ですが、倉山田石川麻呂はそのことを察知して、難波を立ち、赤猪と法師という二人の男の子を連れ大和飛鳥の山田寺に向います。そのことを知った長男の興志は途中まで迎えに出ます。そして父に対して中大兄皇子の軍隊と戦いたいといいますが、父である倉山田石川麻呂は許しませんでした。

そして子供たちに向って、君たちは命が惜しいかとただし、自分がこの山田寺に来たのは命が惜しくて逃げて

きたのではない。この寺は皇太子中大兄皇子の奉為（おんたに）建てた寺である。そしてこの寺に来たのは死を覚悟して、臨終の安からんことを願ってのことである。自分は自害しても決して皇太子を怨むことはしないといって山田寺の金堂の扉を開いて、仏の前で自ら命を絶ちました。子供たちも父にしたがい自害しました。中大兄皇子側は倉山田石川麻呂側の者を捕え、死刑や流罪に処しました。加えて中大兄皇子側の軍がすでに自害した倉山田石川麻呂の首を切りました。これは非道なことだったのです。

ところが、このあと中大兄皇子側は倉山田石川麻呂の遺産の整理を行いましたところ、そのなかに遺書があり、倉山田石川麻呂には蘇我日向がいったような叛逆の意志が全くなかったことが判明し、中大兄皇子は自分の早まった行為に非常に恥じます。

(四)

さて、倉山田石川麻呂の娘で、中大兄皇子の妃となっている造娘の立場に立ってみますと、攻めたのは夫であり、攻められて自害したのは父であるということになります。しかも死んだ父の首を斬ったのは夫の部下であるということです。これを悲しんで遂に造娘も自殺します。中大兄皇子はこの悪因悪業に痛み悲しみます。これを見た野中川原史満という人は

山川に鴛鴦二つ居て偶いよく偶える妹を誰か牽にけむ

本毎に花は咲けども何とかも愛し妹がまた咲き出来ぬ

という二首を詠み中大兄皇子を慰めます。

この事件に遭遇したもう一人の女性、持統天皇。攻めたのは父であり、攻められ自害したのは祖父、そのために母は自殺するという三重の苦しみを感じました。

当時、山田寺は金堂が建てられていただけです。何とかして夫である天武天皇の力を借りてこの寺を完成させたい。天武天皇は中大兄皇子、すなわち天智天皇の弟です。骨肉相剋のこの悪業を離脱したい。そうした願いもあって事件後、塔や講堂の建設がすすめられます。そして、天武天皇十四年、遂に山田寺が完成し、天皇自らこの寺に行幸されました。それはあの痛ましい事件後三十六年の後のことです。罪を滅し、苦から転じ、新しい人生をという願がこめられていたと思うのです。

(五)

以上は『日本書紀』に語られる古代の悲劇の概要ですが、私はこの事件にかかわった多くの人たちのそれぞれの考え方や対処の仕方、そしてその時に臨んだそれぞれの人生観を推察することができるのです。

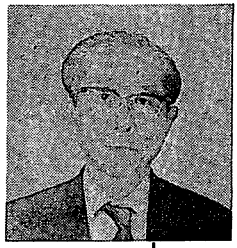
「山田寺をめぐる悲劇」、もう二度とこのような悲劇をくりかえしたくないという願望も読みとることができるのです。

古代の出来事でありますが、現代に生きられる皆様はそこに登場する一人一人の人生を、そしてその人のもった人生観を考えてみては思うのです。

どうも御静聴ありがとうございました。

成人病の予防について

―将来の医学の展望―



社会保険大和郡山総合病院長
澤田　恂

日本人の平均寿命は男子は七十四才で世界第一位、女性は七十九才で世界第二位となっており、近い将来八十才社会を迎えることは確実である。病める八十才社会を迎えるのではなく、健康な八十才社会を迎えることが現在の医学の最大目的であり、今日はその方法についてお話します。

日本人の三大死亡原因疾患は、一位が癌、二位が脳血管疾患（脳卒中）三位が心疾患で、この三疾患で、全死亡の六十％以上を占める。

癌については、そのおこり方に関して、ウイルスの感染や、免疫機構、遺伝子などとの関連についての研究が進められており、その予防や治療は近い将来実現される期待が大となったが、現時点では発癌の危険因子と考えられている食物をさけること、煙草や大量のアルコールを控えること、紫外線、排気ガスをさける一方、ストレスの減少、休養、偏らない食事など、消極的な予防につとめるとともに、癌の早期発見、早期治療を徹底させることが対策のすべてである。胃癌も早期癌の時期に発見された場合は殆ど百％治療し得るようになった。自覚症状のないうちに毎年あるいは一年おきに胃透視をうけると、胃癌による死亡は激減すると考えられている。高価で副作用の強い抗癌剤のお世話になることはなるべく避けたいものである。

成人病の第二は脳血管疾患（脳卒中）であり、脳出血と脳軟化が主なものである。

脳出血は高血圧のある五十才前後の働き盛りの人が、多くは日中活動中に急に意識障害や運動麻痺を来す病気で、死亡率が高く、発癌一ヵ月以内に半数が死亡し、生き残っても運動麻痺、言語障害などが残り、寝た切りになる場合もある。脳血栓は六十才代以上の比較的高齢者に睡眠中または起床後に発病し、徐々に病状が悪化するもので、寝た切りになる率が高い、以前は、寝た切り病

人は、肺炎などを併発して一、二年以内に死亡する例が多かったが、現在では、抗生物質や管理の向上のため、寝た切りで二十年以上生きている例も珍らしくなく、家人の苦労は大きく、経済的にも社会的にも大きな問題となっている。脳出血は働らき手を奪い、脳軟化は家人の看病疲れと経済的家庭的破綻をもたらし、共に悲惨な病気である。一ヵ月三十万円の看護料に耐えうる家庭は幾何あるだろうか？二十年間寝た切りで生きていると約一億円の損失となる。

成人病の第三は心臓病であり、虚血性心臓病が主たるものであるが、心筋梗塞、狭心症などがこれに属する。二十年前に厚生省から研究費をもらって日本における心筋梗塞について共同研究したところ、男性は女性の十倍の発症がみられ、年令は五十才以上が大部分であったが、現在では女性の発病率が大となり、男女比は二対一に近づき、二十才代の発病もみられるようになり、欧米型に近づいて来た。心筋梗塞は急に前胸部に激しい痛みを来し、ショック、心不全、不整脈などを合併し、三日以内に三十％が死亡する。欧米では四十五才から五十四才の年令層における死亡の三分の一は心筋梗塞によると云われ、死亡原因の第一位を占めているが、日本でも近い将来、心臓死が死亡原因の第一位を占めるようになると予想される。糖尿病や肝臓病も成人病であるが、糖尿病は高血圧と同様遺伝因子に過食、運動不足、肝臓病はアルコールの多用やウィルス感染、薬物の濫用などがからみあって発病するとされている。

糖尿病は戦時中は殆どみられなかったものである。動脈硬化を来し、心筋梗塞、胃症などで死亡する。視力障害も合併し易い。

肝臓病は、最初は自覚症状が少いが、食欲不振、吐気、黄疸等の症状が現れた時はかなり病気は進行しており、肝硬変などで死亡するが、現在では、ＧＯＴ、ＧＰＴなどの酵素を血液検査で測定しうるようになった為、早期の発見が出来るようになった。自覚症状のない中に検査をうけることが肝要である。

人間は、生まれた以上必ず死ぬのであるが、死ぬ時は各人の責任で死ななければならない。

八十才、九十才で死ぬ人は、安楽死をとげる人が多いが、四十才、五十才で死ぬ場合はもだえ苦しんで死ぬことが多い。九十才迄元気で生きて一～二日の病気で楽に

死ぬことが出来れば看病迷惑をかけることもなく、文字通り極楽往生が可能となる。

長寿を全うして極楽往生する人をこそ人生の成功者であると云うのではなかろうか。

脳卒中と心疾患を合せて循環器疾患とすると、循環器疾患による死亡は現時点でも死亡の第一位となる。この循環器疾患の主図は高血圧症である。高血圧症とは、最大血圧百六十㎜Hg以上、最小血圧九十五㎜Hg以上の場合を云うが、血圧は測定する条件によって絶えず変動するから、一度だけ血圧を測定して百六十㎜Hg以上であったから高血圧であると考えるのは間違いであり、少くとも三回測定日を変え、毎回三度血圧を測り、その平均値最小値をとる人もある）が三回とも、百六十／九十五㎜Hg以上あった時、はじめて高血圧とするのが常識である。一度血圧を測っただけで高血圧と考えて病人になる必要はない。一億一千万人の日本人の中、約二千万人が高血圧であると推定されているが、その中千四百万人は軽症高血圧症と云われており、これらの約三分の一は食塩制限とストレス解消、運動などで正常血圧を示すようになる。しかし、そのまま放置すると二十五年～三十年の間に脳卒中を起すことが知られている。高血圧は末梢の細い動脈が色んな原因で収縮して内腔が狭くなったり、一回の心臓からの送血量が増加することで発生する。

高血圧症は遺伝素因のある人が、食塩のとりすぎ、ストレス過剰、運動不足など、不適当な生活を送ることにより発症するものである。

血圧上昇をおこす原因は食塩のとりすぎであることは、近畿地方の人の倍の食塩をとっていた東北地方の人に高血圧発生が多く、その結果脳卒中死が多かったことは有名な事実であるが、食塩制限を主とした食事の改善で、現在は高血圧、従って脳卒中も減少したが、これは食塩が高血圧と関係することを証明したものである。動物実験でも食塩摂取が高血圧を発生させることは証明済みである。食塩をとりすぎると交感神経を興奮させ血管の収縮をおこし血圧をたかめると同時に、食塩の過剰は循環血液量を増加させこれも高血圧を来すこととなる。食塩のNaは昇圧をもたらすものであるが、KはNaと拮抗し、K摂取はNaを体外に追出して血圧を下げる働をもっている。Kを多く含有する野菜や果物などを沢山たべると血圧が下ることは事実である。東北で、一日に林檎六個

たべて血圧が下ったと云う広範な実験もある。

食塩をとらないと体が弱るとか、病気になるとかいう人がいるが、ある種の腎疾患や内分泌異常をのぞいては、食塩を減らしたために発病すると云う文献はない。南米のヤノマノ原住民や、パプア、ニューギニアの住民では全く食塩をとらない風習があるが、彼等は結構元気に生きており、高血圧患者はみられないと云われている。極論すれば、食塩は健康を保つために必要なのではなくて、食生活を豊かにするために必要なのであると云ってよかろう。

成人病は習慣病と云われる如く、生れてから以後の食生活や生活環境の誤りの積みかさねの結果が成人病をつくるのである。成人病を予防する食生活についての最近の考え方を紹介する。

食塩に関しては、一日摂取量を十g以下とする。出来たら七g以下とする。七gの食塩だと料理方法を工夫すると充分おいしい食生活を営むことが出来る。懐石料理など結構おいしい。

魚、とくに背の青い大衆魚イワシ、サバ、サンマ等は優れた蛋白質やタウリンを含有し、タウリンは食塩を体外へ排出し、また、魚に含まれているエイコサペンタエンは血栓形成を予防し、動脈硬化の促進を阻止する。心臓を養う冠動脈に血栓を生じると心筋梗塞を、脳動脈に生じると脳血栓を発病する。しかし塩干魚にはこの作用は期待出来ない。

大豆食品はレシチン、不飽物脂肪酸、優秀な蛋白質を含有し動脈硬化予防に役立ち、豆腐、納豆、オカラなど理想的な食物である。

野菜、果物はKや各種のビタミン、特に腸癌の予防になるという綜繊質を多量に含み、成人病予防に有用である。また、海藻類も忘れてはならない日本食品である。これらは、古くから日本人が食していたもので、世界一の長寿国民である原因の一つと考えられる。一口で云うと、コレステロールを多く含有する動物性脂肪は少なく、優れた蛋白質や不飽和脂肪酸、K、綜繊質の多い日本式食事を塩味をうすくして食べることである。

次はストレスであるが、現在の社会生活ではストレスをさける事は出来ず、ストレスは活用すると健康のたすけともなる。ストレスにふりまわされると血圧は上昇し、血栓も生じ易くなる。上手にストレスを解消するために

は、適当なスポーツをする。歌を歌う。アルコールを適量活用する。趣味を持つなどの方法がある。

スポーツをすると、血圧は降下し、血糖値は減少し、悪玉コレステロールは減り、善玉コレステロールは増えるようになる。職症高血圧は、食事規正と適当なスポーツによって治療するのが適正な方法であると云える。一日に三十分以上、脈拍が一分間百二十～百三十くらいになり、汗ばむ程度の運動をすると降圧がみられ、この方法は副作用の心配がない。運動の代りに降圧剤、脱コレステロール剤等を使うと治療費は一日二百～四百円必要となり、色々な副作用発現に注意しなければならなくなる。薬はどうしても必要な時にのみ、また出来るだけ小量使用すべきである。

スポーツにより血中にプロスタグランディンIが増え、これも降圧、血栓防止に役立つ。また、HDLコレステロールが増加するが、このものは動脈硬化予防的に働く。HDLコレステロールは一合程度の飲酒で増加するといわれている。

煙草は百害あって一利なし。止めるにこしたことはない。

砂糖は一日五十g以下とした方がよい。砂糖は循環器能患では中性脂肪は危険因子の一つであるが多くなると中性脂肪も増加してくる。

卵黄やバターはコレステロールが多いため過食しないよう工夫する。コレステロールは少なすぎてもいけないと考えられていて血中懐度百三十～二百mg／dlくらいが適当とされている。食事は一日三回に分け、十分かんで食べるようにする。ストレス解消の方法として、正しい宗教を持つことも必要である。

（才十一回ゼミナー　八四、十二、六　講演要旨）

華やか第二回文化祭

文化協会も二年目に入り、文化祭が催された。十月二十一日の開会式に始まり、十一月四日閉会式まで、各会場で、多彩な行事が昨年の反省を踏まえて繰りひろげられた。

二十一日夕刻七時からの開会式は、北部出張所会議室で、書、絵画、園芸等の作品に囲まれて、会長のあいさつから始まった。恒例の文化講演会は会員の碓井敏正氏に依る「哲学するということは？」、続いて懇親会に移り、正に前夜祭の楽しいふん囲気での開幕となった。

会議室での展示は、前期三日間前記三部門、後期三日間を拓本、俳句、短歌、写真、園芸、アマチュア無線の交信カードが美しく貼り交ぜてあるパネル等。そして前後の期間中、会費のカンパの意をこめて、コーヒーショップが開らかれたが「くつろいで観られる」と好評であった。これらに併行して住友、南都両銀行のロビイの提供を受け、会員の木目込人形、手芸等の作品展もあったが、公民館の作品展示会が、会期中にはなくて、一寸残念。

囲碁大会は十月二十八日平城西公民館で、約四十人の参加者を得て、対局した。

折柄、菊の季節とあって、右京四丁目の浜口氏方で、協賛出展として、みごとな「菊花展」が催され、文字どおり花を添えた。

協賛出展として平城高校郷土史研究会のメンバーの調べた、「平城ＮＴの住民のお正月意識調査」がパネル表示され、南都銀行のロビイを賑わせた。

サンタウン一階ホールでは、十月二十六日から三十日まで教育懇談会協賛出展として「平城ＮＴ教育懇談会の歩み展」があり、会員の「教科書指導要領のうつりかわり……」という発表に、若いママ達が足を止めていた。

終幕を飾るイベントは、十一月四日、午後一時から、右京小学校講堂で、会場を埋める人々を前に熱演がくりひろげられた。孝田先生の口演童話は熱を帯びて聞く人をひき入れ、フォークギターの軽やかなリズムに思わず体がのってしまったり、コーラスでは司会の山内さんがマイク片手に会場を廻り、みんなの声を響かせる。詩吟、

民謡の方々の力演、そして西中学の生徒さんたちによる、演劇、吹奏楽の素晴らしさにうっとり……。副会長の下条先生の閉会のあいさつで第二回文化祭を終った。

◇ 文化祭出演者

（敬称略）

◇童話
「三まいのおふだ」　孝田　有禅
◇フォークギター
「岬めぐり」など　奥　長生
◇うた
「みんなで歌いましょう」　指導　大山　友子
◇舞台劇
「人形館」　平城西中学校演劇部
指導　安田　絹子
北村　雅昭

◇詩吟
「白帝城」　内藤　喜代
「九月十三夜」　木村　長子
「獄中作」　青山　浜子
「白帝城」　大迫きく枝
「弔子楠公墓」　永原　寛子
「九段桜」　岩井あさえ
「峨眉山月歌」　植田　浩
「富嶽」　後藤　のぶ
「吉野懐古」　柏木　一枝
「幾山河」　景山　知子
「富士山」　内田　律子
「賞弘道館梅花」　西峯　提暁
「山行」　吉本　提幸
「中庸」　吉本　提瑞
◇民謡
「十三の砂山」　谷口　静子
「シャンシャン馬道中唄」　間部　良英
「新庄節」　内藤　喜代

◇吹奏楽

平城西中学校吹奏楽部
指導　郡山　裕子

◆出品者

（順不同、敬称略）

◆絵画

藤井忠克、下条新太郎、筧裕、梶野哲、仁科里子、山田寿郎、山田正子、松尾佳枝、高橋節子、藤丸安代、佐々木のり子、盛田桂子、山田敦子、古川千鶴子、高篠陽子、沢田律子、大浦小枝子

◆拓本

渡辺亮斗、永田喜一郎、筧裕、筧英美、大山美寿栄、鈴木玲子、盛田桂子

◆俳句

牧野春駒、牧野和代、牧野友美、三井サチ子、西山佐代子、永谷秋乃、永原寛子、柏木一枝、喜多まさ、廣田春、木村長子、川口シズヱ、森村和枝

◆短歌

左門璃晃、網干善教、田中綾子、三井サチ子　西山佐代子、岡田越子、久門富美、木庭和子、永田喜一郎、宮川恵美子、山元洋子、大浦小枝子

◆園芸

遺作　故西峰源之錠

永田喜一郎、山口道子、三井サチ子、岡田越子、西山佐代子、大浦小枝子

◆写真

永田喜一郎、栗山禮次郎、淺岡末治、太田安彦

◆書

川口勇、川口貞子、金沢節子、中西八代子、奥島公子、阪口修一、浜口光良、鬼頭かつみ、田室利雄、鈴木玲子、宮川秀子、竹本千鶴、佐々木倫子、宮本郁江、保田理恵、石崎敏子、岡島藤子

◆ミシン刺繍

岡田越子

◆木目込人形

谷口直子、菅原静子、木村長子、奥島公子、林田メ子、奥野昌子

公民館も作品展示会

平城西公民館は、平城ニュータウンの西方、神功四丁目に位置し、市下第十四番目の公民館として、さる昭和五十五年九月に生涯教育の拠点として開館し、今年で開館五周年を迎えます。平城ニュータウンの人口増加に伴い、年々利用者も増加しています。

現在公民館では約二十の自主グループが、文化、創作の各方面で幅広い活動をされており、公民館としても文化、教養の向上の場として、また学習を通じての仲間づくりの場として、自主的、自発的な活動を盛り上げ、「学習」「連帯」「創造」を三つの柱に、古都の歴史と伝統を生かしながらも、ひらけゆく輝かしい未来を志向する新しい市民文化の創造を目標に、活発な公民館活動の展開をめざしております。

今回の展示会は創作活動のグループの方々の日頃の活動成果を発表して頂くため、多大な協力を頂きました。出品者は次のみなさんです。

▽ラタングループ（籐編み）
木村利子、石森千代子、君田君江、阿部ふみ子、伊加田廸子、安田佳子、工藤恵子、内藤頼子、野田雅子、中江みどり

▽すみれの会（刺繍）
森岡すえの、礎部美知代、中井悦子、松下智子、山田はつ子、福本百合江、堀山恵子、木村利子、松井順子、岸田啓子、下別府芳子、福島ユキエ、田村典子、袴田祐子

▽SSSグループ（アートフラワー）
藤山登喜、福井明子、野田雅子、谷前桂子、森崎通江

▽紅絹の会（洋裁）
樽井淑子、岡本明美、細谷まり子

▽一友会（手描友禅）
渡辺公子、玉乃井律子、斎藤多寿子、高松美枝子、三井サチ子、黒田正子

▽絹の会（洋裁）
丹羽千恵子、山崎たみ子

▽もくれん
森田英子、森本順子、芝英子、谷前桂子、藤永静代、西規子
▽キルト会（パッチワーク）
海老沢冨美子、片岡亜矢子、斎藤多寿子、高井由利子、玉乃井律子、中村多美子、東谷タカ子、藤本和子
▽バラの会（刺繍）
山本清美、北川尚子、吉川洋子、松浦恵子、河合文子、工藤恵子、田中幸恵、前口明美、安達早苗、岩城光代、橋本千鶴子、松岡昭子、山田正子、黒田正子、室井和子、細川まり子、宮川章子

初の新春かるた会

「かるたをしませんか」という御年輩の会員の方からの声があり、第一回新春かるた会を一月八日に持ちました。歴史講座の後、参加人員十五人昼食を共にし、少しお酒も入り、松の内気分でさあ対戦となりました。でも経験豊かな方と初心者の差が大きく同一に争うのは無理なことがわかり、二組に別れました。読み手は共通です。初心者側が経験者側よりも先に札をとり天狗になる一幕もあり、久し振りに童心に帰った一日でした。

また初心者の私は、ただ優劣を争うだけでなく〝百人一首〟を文学として味わうとこの一面も教えられた有意義な会でした。来春はたくさんのお越しをお待ちしています。（大浦小枝子）

グループの活動

楽しく学んだ大和路見学会
（60年6月2日）

歴史教養講座

「歴史教養講座」はむつかしい考古学や歴史学の講義や学習ではありません。私たちは長い歴史のなかで生活しています。ものの考え方や、そのものの意味、そうしたことがどのような歴史的経過のなかで生れ、使われてきたかといつたとを知ることは、よりよく生きていくための糧だろうと思うのです。例えば「飛鳥」と書いてなぜ「アスカ」と読むのか。「飛」という字の筆順はどこからどう書くのか。「七夕」と書いてなぜ「タナバタ」というのか。といった日常生活の基礎的知識の具体的なことを知ろうというのが第一点。もう一つは「おやじの歴史と子供の歴史」(?) で話題になったように、日本の歴史に対する考え方や学び方が戦前と戦後、いやそのような大きなことでなくとも、親が習ったことと子供が今習っていることとの間に大きな違いがあります。

子供に勉強しろ、勉強しろとしかっても、子供から質問があっても答えられないということでは困ります。特

に母親は重要であります。

生涯教育とか生涯学習とかいう言葉があります。もちろん勉強は自分のためにするものですが、それがひいては子供のため、友人のため、地域社会のコミニテーのために大切な役割を果すのです。

文化協会の「歴史教養講座」は、歴史に対する関心と知識をもつため、時事的な解説と一つのテーマを選んで学習しています。現在は「古代天皇の系譜」という一見むずかしそうな題目ですが、私も楽しく話していますし、皆様も興味をもって下さっていることと思います。今やっと五世紀位の古墳時代まできましたが、これから飛鳥時代や奈良時代へ展開します。五年か十年間の長丁場で継続したいと思っています。いつからでも、自由に参加できます。講座は毎月第二火曜日の午前十時からです。

（網干　善教）

古代史講座

古代史講座は、毎回二十人程度集まって、奈良の都や古代の村、地方の古代の役所などの発掘の内容を勉強しています。毎月第三か第四の土曜日、午後二時から、北部出張所の会議室にあつまって、一時間ほど講師役の私が話しをして、あとは質問や感想など、おしゃべりが三十分から四十分、話題は、古代人の日常生活から、講師の話とは関係なく、時間のゆるすかぎり、ひろがっていきます。特別むずかしい専門的な話は少ないのですが、でも時々、講師がうろたえるような質問もとびだしたりします。このような部屋のなかでの勉強も楽しいのですが、参加者一同、講師役の私もふくめて一番活気のあるのは野外勉強と称して遺跡の見学にいく時です。ハイキングがてらの野外見学は、年二～三回といったところでしょうか。

講師役の方としては、古代史を気軽に勉強していくという方針ですすめたいと思っています。今年度も奈良を中心にして宮跡などの発掘成果を学んでいくことにしています。お気軽に御参加下さい。テキストもありませんし、予備知識もいりません。

（鬼頭　清明）

奈良大和路を見る会

日本人のふる里「奈良大和路」の文化財を主題にしたビデオ「大和の文化財」は、文化協会の網干善教会長たちが企画監修して奈良県教育委員会が製作した、全一〇〇巻にも及ぶ「奈良大和路の文化百科辞典」とも言うべき映画シリーズで、週に二回、奈良テレビで放映され、文化教育面ばかりでなく観光的にも高い評価を受け、毎年、再放映されているものであります。

但し、この平城ニュータウン地区の住民の方は、全国各地より転入して来られた人が多く、また、「奈良テレビ」が一部の地区では電波の関係で映らず、この「大和の文化財」シリーズを見ることが出来ません。

私は、この平城の地で生まれ、この「奈良大和の風物」には、特に関心が深く愛着を感じ、足の不自由な障害者になった今日でも、この奈良の地を離れることが出来ず、県が助成している「奈良県伝統工芸共励会」や「奈良市観光協会」の会員となって、それぞれの組織に参加しておりますが、そのための会合に誘われても「吉野」や「飛鳥」や「山の辺の道」まで、自動車を利用しても参加することが困難であります。

だが幸いなことに、最近のニューメデアの進歩により、テレビのビデオデッキの開発により、どんな映画でもビデオテープに録画して、家庭において楽に鑑賞することが出来るようになりました。

そこで私は、私同様、歩くことが困難な老人や障害者にテレビで観て貰うため、知人の入江泰吉先生等「奈良県美術人協会」会員の協力を得て、写真・絵画・陶芸を通じて「奈良大和路」を全国に紹介するためビデオソフトの製作に取組む、一方、「奈良大和路」に関するビデオテープのコレクションを始めました。

そして、そのビデオを上映するための「ビデオシアター」をこの平城ニュータウンで開設すべく計画しておりますが、取りあえず、網干会長等が企画し県教育委員会が製作した「大和の文化財」シリーズを主として、北部主張所の会議室において、毎月第二・第四金曜日の午前十時から午後二時まで、評判の高かった「記録映画」や「懐しい劇映画」を三時間位の予定で、順次、上映す

ることにいたしました。

上映日程、映画名等は、追って文化協会ニュース等でご案内いたしますから、その節には、ぜひご鑑賞下さるように、お勧めいたします。

（野村　信治）

読書グループ

十七世紀のイギリスの哲学者フランシス・ベーコンは、その随想録「学問について」の中で次のような言葉をのこしている。

反対したり論駁（ろんばく）するために読書するな
さりとて信じたりそのまま受けたり
話や議論の種にするために読書するな
ただ思考し考察するために読書せよ
ある書物はその味を試み
あるものは呑みこみ
そしてある少数の書物は
よく噛んで消化すべきだ

読書グループは、文化協会の発足と同時に結成し、すでに二十五回の例会を迎えていますが、終始一貫ベーコンの教えを守り、あせらず、きばらず、楽しく読んで、楽しく語り合うことをモットーとして続けてきましたし今後もこの線でいくつもりです。

昭和五十九年度例会開催記録

第十一回　四月二十二日　津村　節子著
「炎の舞い」

第十二回　五月二十六日　吉野　せい著
「はなをたらした神」

第十三回　六月二十四日　井上　靖著
「星と祭」

第十四回　七月二十二日　野上弥生子著
「秀吉と利休」

第十五回　八月二十六日　井伏　鱒二著
「黒い雨」

第十六回　九月三十日　水上　勉著
「湖笛」

第十七回　十月十二日　萩原　葉子著
「蕁草の家」
第十八回　十一月二十五日　吉村　昭著
「冷たい夏熱い夏」
第十九回　十二月十六日　山本周五郎著
「小説日本婦道記」
第二十回　一月二十日　曽野　綾子著
「遠ざかる足音」
第二十一回　二月十七日　川端　康成著
「美しさと哀しみと」
第二十二回　三月十七日　石川　達三著
「幸福の限界」
（大橋　一二）

―会員のコメント―（五十音順）

木庭　読書会も二年目となると、ぐっと親密度が増し、その分、脱線また脱線――第二回目の新年会は読書会は横においといて、専ら〝人生を語る〟座談会となりました。生活経験豊かな男性も入会されましたが数の上では、三対一、一冊の本を真ん中に五対五のお話合いを夢見ています。

田中　人間の本質、人間と自然との関り、生きる意味、愛とは……等々、読書会を通じて、私自身の精神の限界を知り、常に本当の自分との対話を続けたい。

南村　昨年の夏体調をくずし、テレビコマーシャルではないが、「やる気はあるけど、体がついてこん」という状態になり、うつうつとした毎日でしたが、明かるい本を読むことで気分転換、それ程おちこまずに過ごせたのも、嬉しい本の効用でした。

西島　途中で入会しましたので、読ませて頂いた本はまだ、七冊位でしょうか。今迄はとかく頁を斜めに、筋書きを追うだけの場合が多かったのですが、グループで読むとなるとそうはいかず、一行一字もゆるがせにはできません。ともあれ感じたことを自由に気兼なく、大橋先生はじめ皆様の御人柄に甘えて、発言させて頂いております。

真鍋　本を読む度に、主人公になりきって、たった一度の人生を何十回も生きる楽しさ。登場人物の生き方の素晴しい所はすべて、吸収。えてして複雑怪奇人間誕生。

三木　読書会に行ってもあまりしゃべらず、おおむね聞き役に過ぎませんが、自分と同じ意見を言われると「快哉」と嬉しくなります。

読後感に伴い各自の経験談や世相批判にまで移ることがありますが、これも大変楽しみです。

三野　読書会に入会してまだ半年ですが、自分の好みばかりで読んでいた時と違って、話し合って決った課題の本が、新鮮な気持で読み進む事が出来て新しい世界がひろがります。月一回の集りも楽しさの中に、自分の生活への反省もあり教えて頂くものが多くあります。

山元　例会が近いから、精を出して本を読む。本を読み出すと家事が出来ない。家事が出来ないと料理が、特に昼食がおろそかになる。大体、残飯の整理になる。残飯は味気ないから、せめて好きな本でも読みながら食べようと思う。だから又、本を読む。買って読む、借りて読む、本屋で立ち読みする。そうすると買物の時間がなくなる。本を読み出すと……。嗚呼！

中国語講座

早いもので、下条先生のあとを引き受けてやり始めてから丸一年がたった。中級講座として、六月四日から、四人でスタート、途中新旧交代があって、現在は七人、週一回で、月曜日の午後三時から五時まで、市北部出張所で、声を張りあげている。テキストは「実用中国語会話六〇〇選」で、将来中国へ行った時、最低これだけ話すことができれば、何とかなると、毎回中国へ行ったつもりで、練習をしている。道を聞いたり、買い物をしたり、食事をしたり、只、一年目の週二回から、週一回になったのが不利だと思いつつも、そのかわりに、ゆっくり、一つ一つものにしていこうと、何回も何回も読ませ、毎回終りの十分程、小さなペーパーテストをしている。

嫌われながらも、好評？のようである。途中から参加の三名には、「特別に発音指導はしない、それでもよければ」と条件づきで参加してもらったのだが、この一年間本当によく頑張られた、かいあって、今では読む方では先輩の三名に追いついたようである。先輩の三名も、時々のやさしい説明をいやがらず、よく援助して下さった。こういう人達なので、休憩の十分間は、実に和やかで、お茶やお菓子をつまみながら、ワイワイガヤガヤ、ついつい延長のはめになる。こんな状況なので、今後も暫く、新しい方を受け入れることはできないが、どうぞ御了承下さい。

最後に、今は先生と生徒という立場だが、全員が中国に興味を持っているので、いつか中国を媒体にした、同好会のようなものに育ったらなあと、私自身考えている、その折には、是非ご参加下さい。

（久冨木幸子）

拓本を楽しむ会

昨秋の文化祭には「山辺の道」を主たるテーマとする拓本を出品したが、その後会の活動は次の通りである。

(1) 十二月二日　午前十時　北部出張所会議室

文化祭の反省会をかねて今後の会の活動について協議、来春に採拓できるまでの間は各種研究会、展覧会等に参加し、専ら充電勉強することとした。

(2) 十二月十六日　午後　県文化会館

倭万葉拓本研究会（会長宮下亜洲氏、事務所大和郡山市筒井）主催の拓本展に盛田さんと見学。作品の表装は会員それぞれに作ったものの由、表装修得の必要性と痛感した次第。

(3) 六十年一月二十七日　午前　大阪南千里

右の会の山地氏からお誘いあり、会員手製の採拓墨を

受け取りがてら採拓状況を見学、小生も芭蕉の古池や云々の句碑を採拓したが外に万葉歌碑もあった。

(4) 二月十六日　午後七時　北部出張所会議室

当文化協会主催の研修セミナー「石摺の詩」と題して拓本の技法一般の講習会　講師　内田弘慈氏、全会員の外多数の参加者あって盛会裡に終った。

(5) 三月三十一日　午後　県文化会館

第一回日本墨彩画美術展（主催者　内田弘慈氏）を会員六人で見学。会員の大山さん、盛田さんが出品されたがその作品は他の作品と比べて遜色ない見事なもので私共も大いに意を強くした次第。美術展見学後食堂でコーヒーを飲みながら愈々採拓に向けての活動プランを話し合った。

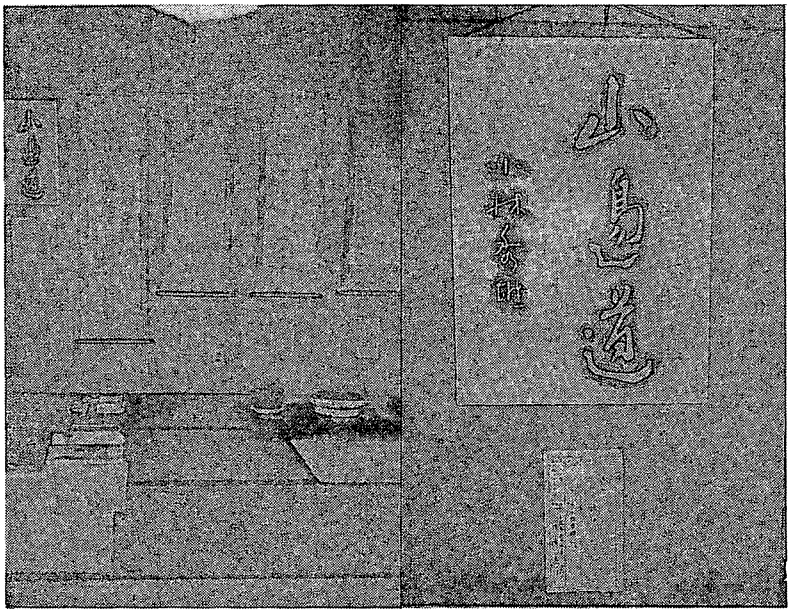
(5) 四月十四日

例会の日であったが協会の総会と重なり結局小生が桜井市大福で採拓した。

(6) 五月三日　例会

総勢九名で桜井市穴師、松原へ採拓に赴く、天気が良過ぎたが大体三時過ぎまで採拓した。新入会員として、近藤義敏氏を迎えることになった。

（渡辺　亮斗）



絵画の会

土曜日の午後二時三十分頃、会場の会議室のドアを開けると、もう二、三名が机に向かい、眼は壁際のモデルと画面に向けられています。花や果物が二か所に配置されています。「花びんの形、これでいいのかしら」「おかしいわ。りんごと壺の位置がはっきり出ない」「この葉はいちいちきちんと描かねばならないのかな」それぞれ自分の絵に期待と不安を持ちながら真剣な写生が続きます。新に二、三名が加わり「いやあ、うまく描けてるわよ」先客の出来に声を放ちながら負けじと画面に筆を運びます。「花の色はむつかしい。こんな赤は絵具には無いしね。」「今日はだめだわ。」「ほんと、いい色出てるじゃない。」「まあ、家で続きを描いてみよう。」感想は諸々ながら、これで成果はあるのです。一年、二年と続けるうちに、ご自身にはお気付きで無いとしても、堂々と、楽しそうに立ち向っている姿には、何らかの自信の程が垣間見られるのですが如何でしょう。この三月の市展「なら」に入選者が出たことは、ご本人の喜びは勿論　仲間にとって、大きな励みとなっています。

水彩での静物写生が主ですが、五月の水上池での風景写生。八月、三月の梶野先生ご指導の油絵集中講座。その他デッサン、クロッキーなどバラエティも考えています。美術展の共同鑑賞もふやしたいものの一つです。常時五、六名～十二、三名が集まっています。当番が、写生モデルを用意するほか、描きたい物を自分で持ってきたりします。会場へ来ると、誰もが、何かの絵が描けるように努めています。いわゆる初心者の方の新入を歓迎しますが、熟達者も、半熟の方も参加して頂いて、応援してほしいものです。

（筧　裕）

木目込み人形・押絵の会

木目込み教室は開講が一年余りおくれて五十九年の六月から谷口先生をお迎えしてたのしい教室を持つことが出来ました。部員数はまだ四、五人といったところです

が、何しろ先生がお若かく、それに木目込み人形の化身のようなお美くしい方にも似合わず、捌けたお人柄でまるで師弟というよりも、仲の良い嫁・姑のような雰囲気の中でむづかしい技巧を要する箇所も「どれ、どれ」と気さくに手を貸して下さいますし、和気あいあいのうちに瞬く間に二時間半が経過します。

開講して日が浅かったのですが、五十九年度の第二回文化祭には先生のお作品の賛助も得まして、ささやか乍らも綺羅びやかな人形展を南都銀行のロビーに持つことが出来ました。先生のご尽力の賜と感謝しています。

本年三月末に入りまして先生のご都合で大阪市内にご転居になりましたが、教室の方は引きつづき遠い所をご出講下さることになっていますが、四、五月はご転居先きの整理や何やらで一時休講となっていますが、六月からはまた、格調高い日本独自の手芸の美くしい作品を教えて頂くことになっています。

泣いたり笑ったりして苦労して製作してゆくものが、一つの作品として残ってゆくことは、やはりたのしく、うれしいものです。

ご一緒に気品高いお人形を、そして床しい押絵をなさいませんか。とても明るく和やかな教室です。

（木村　長子）

コーラス　「それいゆ」

このグループは文化協会が出来る以前の五十七年七月に公民館の自主グループとして発足し今年で三年目になりました。文化協会には賛助会員（団体）として発足と共に仲間入りして居ります。昨年（五十九年）は第二回文化祭の上演部門で出演する予定でしたが日時や先生方の都合で参加して居りません。少し残念に思って居ります。しかしグループとしては奈良市ママさんコーラス協議会の発表会に参加、十一月にはＮＨＫママさんコーラスイン奈良にテレビ出演しました。又国体の開始式には各会場での式典に参加するなど大いに活動出来た一年でした。六十年度からは奈良県の合唱祭（六月十五日）にも参加することにしています。

まだまだ初心者ばかりですが、歌の向上と心のハーモニーを大切に毎週木曜日午前十時より正午まで平城西公

民館で練習を続けて居ります。年令に関係なく二十九名のすてきなお母さんたちが和やかな一時を、よき指導者のもとに過して居ります。魅力あふれる指揮をして下さる永見純子先生は生駒から、また昨年ママさんになられた島田和美先生は郡山からそれぞれ熱心に、私共のご相手をして下さってグループ全員いつも感謝して居ります。発声練習に腹式呼吸をとり入れるなど健康保持にも大いに役立っていると思います。いつでも見学にいらして下さい。

（西　絢子）

詩吟の会

文化協会の詩吟の会も目出度く二年目を迎えました。何しろ数ある協会講座の中で、月三回も教えて頂ける講座はわが詩吟の会を嚆矢としますので、すでにレパートリーは六十曲にもなんなんとしています。ではそのマスター振りはと問われますと一寸困るのですが――。

けれど、何しろ先生が大へん熱心にきちんきちんと時間励行で必ずご出講下さいますので、生徒たちもなるべく欠席のないようにと精進しています。メンバーは余り増えませんが、受講した以上は脱落がないというのが唯一の自慢です。やはり、うんと若い世代には古いと映るのでしょうか？ニューミュージックのような人気はありませんが、古き良きものの分かる世代で表舞台でなくとも細く長く引き継いでゆけばいいのではないでしょうか。古典とはそんなものだと思います。ポップスの好きな人達もいずれはまた同じ道程を歩くのですから――。先生は詩吟の唱法だけではなく、その漢詩の出来た時代背景の歴史についても詳しく説明して下さいます。

現代の何か目まぐるしい世相から一刻抜け出して、ある時は李白と共に荆洲に遊び、ある時は頼山陽と吉野の花を賞ずるのも、又、楽しからずやの心境です。

良き師を仰ぎ得て数人のささやかな会ではありますが今後とも及ばず乍ら精進してゆきたいと願っています。志のおありの方は一度ご参考までに見学にお越し下さいませ。お待ち申しています。

（木村　長子）

園芸同好会

園芸同好会六十年度の第一回四月例会を第四日曜日の午後、北部出張所会議室で開きました。

当日の内容は、園芸よもやま話の趣のあるまことにバラエティに富んだもので、サツキや松柏の盆栽を前にして盆栽から野菜作りに至るまで、また土作りから潅水、肥料のことや農薬に至るまで二時間半みっちりでした。

五月例会は、北村宅において五月第四日曜日と当日参加出来なかった方のため特に翌月曜日にも聞きました。

内容は、サツキ盆栽の展示を前にしてサツキの楽しみ方いろいろで、サツキの植え方、樹形の作り方、花を楽しむコツ、苗木をふやす時の芽のとり方など、サツキ百科の集中講議でした。

六月例会の予定は、五月例会の延長線上でサツキ盆栽の実技として、石付き、古木付けを実際に作っていただく予定です。

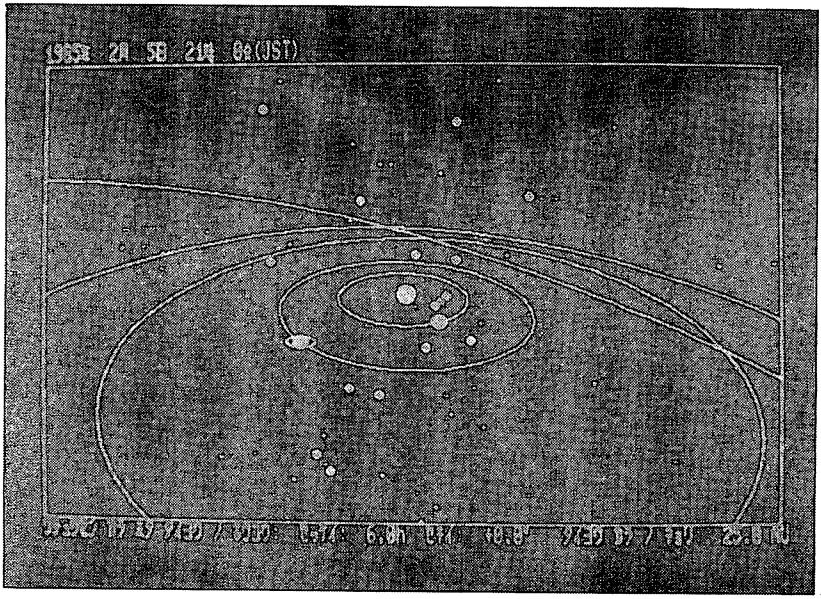
園芸と一口に言っても誠に広く、本格的な盆栽から、庭園樹、草花々壇、野菜作りなど、夫々に奥が深く、会員の皆様の多様な期待にこたえるよう、テーマを決めて例会を行うにせよ、テーマ以外のことについても話題にとり上げて、同好会の例会が益々繁昌する様に願っています。

（北村　孫衛）

星を見る会

今年になって、にわかに賑やかになったのが、ハレー彗星。星界の事象の中でも、人類の歴史にとってもその周期ごとに、ひときわ関心を呼び続けてきたその彗星が帰って来る（回って来る）のですが。記録によれば、その都度大騒ぎをしたようですが私達も、そのとおりのようです。マスコミ、カメラ、望遠鏡メーカー、旅行社（国外でより長く見られる）や純粋な科学的立場に立つ、あらゆる機関を含めて、過大な期待は抜きにしても、大きな関心を持っていきたいと思います。

宇宙は限りない興味を呼びおこしてくれます。普通目にするのは夜空の星々ですが、私達は、その星々の彼方



に宇宙を見ることになります。最近の雑誌によれば、ボイジャー2号が来年1月、天王星に接近し観測する準備が始まったという。ボイジャー号は、これまた有名な「惑星直列」のチャンスを利用して、惑星探査を行うため、一九七七年に打ち上げられ、木星、土星、の接近から、天王星（八六・一）海王星（八九・八）を通過するもの。また、パイオニア一〇号（七二・三打ち上げ）は、太陽系の外へ出て、ちょうど二年。あと六年ほどは、電波を地球へ届けながら、果てしなく飛び続けるという。

最近も、銀河系の中心構造や、ブラックホールの存在が報道されました。星々の彼方の話題は尽きることはありません。私達の存在そのものと、たゆまぬ努力する人々の成果でしょう。私達は、これらを大いなる関心事として、身近な、夜ごと目にする星々から、興味を深めていけば良いのではないでしょうか。最後に、パソコンで描いた図を紹介します。

（比下　享）

地酒を味わう会

「酒は百薬の長」とも亦「酒は気違い水」とも昔から云い伝えられ、酒を好しなまぬ人は、どちらが、ほんとうかと戸惑われることだろうが、酒には何の責もないことで飲む人に依ることですが、我が会の会員には、気違い水は一人もなく、月に一度の例会は誠に楽しく有意義に過し、発会以来三年目になりました。

会長の一期も終り、三月の例会に弁士交代と云ふ所でしたが、会員からもう一期とのお声で、引続き会長の地位を保つことになり、感謝、いや、感激、いや名誉なことと、いくらかでも会員の皆様に喜んで頂けるならと、一層よい会に育ててゆこうと思って居ります。会の本質の通り、全国銘酒四千余の中から、必ず二、三本は新しい銘柄を味って居り、会費も出来るだけ安くと、千円から最高参千円どまりでやって来ました。さて一年の経過です。

五十九年　四　月二十一日　味杉で

五　月十二日　朱雀公園・青天井にて

六　月　九　日　中村氏宅にて「さつき観賞」

七　月十四日　宝山寺洗心閣一泊、暁天会を兼ねて

八　月　四　日　朱雀公園　納涼を兼ね

九　月　八　日　中田氏宅　月見が雨にて

十　月十三日　味杉にて

十一月　十　日　浜口氏宅　観菊会

二　月　八　日　ちどりにて

六十年　一　月十二日　味杉にて新年宴会

二　月十六日　春鹿酒造見学後「酒肆春鹿」にて例会

三　月　九　日　吉田会長宅にて

自分になー

なまけるなー　おこるなー　いばるなー　あせるなー

くさるなー　おごるなー

右条々自戒自守

（吉田　篤史）

渡辺　当会は五十八年四月発足以来、八月の盛夏を除き原則として毎月第二土曜日を例会日として今日まで休む

ことなく続けられている。今年の一月に吉田会長が留任され不肖私が副会長の重責を荷うことになったが、例会出席も芳ばしくなく内心忸怩たるものがあり甚だ申訳なく思っている。

さて会員中田行彦氏の労作（その意味で感謝申上げる次第である）になる昭和五十八年度での愛飲酒一覧をみると飲んだ銘柄は「越乃寒梅」を皮切りに「湖の誉」までなんと三十種である。少い日で二銘柄、多いときは四銘柄もある。五十九年度も同じ位の量を飲んだとすれば実に六十余となり飲むも呑んだりの感を深くする。

しかし、一升壜の蓋をあけコップにつがれた酒の一口目は大いなる期待もあってか何とも云えない味いがする、まさに地酒を味う感じである。私は先ず甘口か辛口か、濃いか薄いか、自分に向きそうな酒か、或は一寸癖があるか等と一口ふくんだ時に私なりの判断をしている。専門書によれば「濃醇甘に、淡麗甘口、濃醇辛口、淡麗辛口」とあるが、私はどちらか云えば淡麗辛口が好きである。要は飲む者の嗜好に合った酒が良いということであろう。

次に奈良県の地酒は「奈良県年鑑」によれば五十七銘柄ある。今まで味ったものは「春鹿」「出世男」「金扇千代」「山の辺の道」である。酒蔵は春鹿を吉田会長のお世話で、金扇千代は網干会長自からのご案内で見学することができたのは何とも有難いことであった。更に春鹿では会として樽買いをして会で命銘し大いに飲もうとの話にまで発展したが、その実現を望むや切である。私は全国府県にわたる銘柄も良いが、地元地酒で残っている五十余の酒を飲んで味いたいと思っている次第である。

中田　五十八年四月「地酒を味う会」の発会式で幻の名酒と言われる「越乃寒梅」を飲んだ。なんだこの水っぽい酒はというのが実感であった。そして約五十銘柄を味った一年後、「越乃寒梅」を味うことができた。なんとうまい酒か、癖がなく、すなおな味である。「うまい」という味が少しはわかりかけてきたのではないかと思った。

「越乃寒梅」は、日本一の酒米「山田錦」を用い、いい水を使っている。それ以上にうまい酒を作るのに重要なのは、採算よりうまい酒を作ってやろうという作る人の気骨であると思う。高く購入した酒米をくせのある匂いを無くす為に糖の部分を削りに削り半分以上も捨ててしまう。また品質が保証できる冬期にしか作らず少量生産

を守っている。よほどの気骨がないとできない事である。
ウイスキーは、全国銘柄が制覇しているし、ビールも世界ではいろいろな味のビールがあるのに対し、日本では麒麟ビールの真似をした味になってしまっている。
「地酒」は、米と水と気骨により日本各地の風土で育ち、根付いた「文化」である。
「地酒を味う会」は、日本文化である全国の地酒を味わえる楽しみとともに、本来飲んべである私は本音として、どんな名目であろうと毎月酒を飲める楽しみがある。またなんと言っても、職業、年令が違っても酒を愛する個性豊かな人々と酒をくみかわす楽しみが一番である。
日本酒は約四〇〇〇銘柄あり、このペースで行けば「地酒を味う会」を二〇〇年間続けないと味いきれないことになる。長く続けていきたいものである。

岸本　三年目を迎えた四月の例会は、生駒宝山寺洗心閣で、ゆるゆる一泊でやろうとの事で、それぞれ車に分乗して三十分余りのドライヴを楽しみ、会場に到着した頃はあたりには人影もなく、静かに夕闇が漂いはじめていました。荷物を運び入れてやれやれと腰をおろそうとした途端、会長、「サアこれから花見だ、一升瓶とおつまみ持って行こう行こう」と足早に出発されます。今から何処へと一同訝りながらも後に続いて裏道の急坂を登る事しばし、夕闇の中にパッとあたりが白く満開の桜があでやかに咲き揃っているのです。枝一杯花に埋まった古木の下で汲みかわすその味は正に天下一品、出るのはただ花をほめつつ酒のうまさをたたえる言葉のみ、思ひもよらぬ花見の宴が持てたしあわせに一同みち足りて、そのあとの奈良市街の夜景を楽しみながらの洗心閣の例会は何時にもまして盛り上りました。
いみじくもこの夜の酒は肥後の「美少年」「灘の富久娘」越後の「初花大歓喜」等々で、かっての美少年、富久娘達は大歓喜いたした事でした。

人生を語る会

前号にも書いたが、私の担当している俳句会の方は、少しずつでも出席者が殖えてきているのに、この会の方はどうも殖えないので、平城院の行事「若い人達と宗教

を語る会」の二時間後に平城院で開くことにしたが、あまり変化がないし、出席して下さった方も「若い人達と宗教を語る会」との活のつながりがはっきりしなくて、かえって混乱を来しているようなので、残念ながらこの会の方は当分休会にして「宗教を語る会」に吸収させていただくことにした。

「若い人達と宗教を語る会」はもとより無料で、「若い人達」といっても「心の若い人達」なら誰でもよく、結構年配の方も出席されているので、会員の方々もご遠慮なくご出席をお待ちしている。「若い人達と宗教を語る会」は毎月第二日曜一時から平城院で開いており、変更のあった時も行事案内を奈良版の各新聞に載せていただいているので、ご覧いただきたい。

（牧野　自然）

短歌

短歌入門講座が開講されて早くも二年は過ぎ二十五回目の歌会を迎える事が出来ました。

去年の五月は左門先生主宰の寧楽歌人会の方達との合同歌人に参加させていただき大変勉強になりました。

今年の新年合同歌会も大勢の先輩達に囲まれての楽しい歌会をもたせていただき、私達にとってとても力強く感じました。

また一月二十五日の朝日新聞PR版に平城文化協会の一講座である短歌会の実状を掲載していただき、次々と新しい方も入会され嬉しい反面、互に家庭の主婦である私達には、やむなく休んだり止めなくてはならない状況に置かれる事は淋しく思います。

当初は日記代りと始めた歌も一首一首を左門先生の熱意ある懇切丁寧な御指導のもとに今では生活の一部となり切り離せない喜びに変って来ました。

四季折々の歌、生活の歌、旅行、時事とさまざまな歌にも鑑賞する力も進歩し、会員相互の心に通じ合うものがあり和やかな雰囲気で勉強させていただいています。

一ヵ月一度の第三火曜日も待ち遠しく感じられます。今年からは我々自主的にやりましょうと云う話し合いの結果、当日の司会、出詠歌の印刷も輪番制でする事になりました。

途中で入会される初心の方でも各自の出詠歌を互選互評しながら先生より、文法、短歌用語の使い方を教えていただき、添削していただく事で一段と格調高い歌になり、皆が感動させられます。

これからも多くの方が入会される事を期待し、何時までも良い講座として続いてゆく事を願っております。

（宮川　恵美子）

俳句会

「俳句なんてとても」としりごみされる皆さんを励ましながら、俳句会もここまで歩いてきた。自然を写すと、いことの中に自己をうたうということが、昨今のように自己を何とか際立たせようという文化が大手を振っている時代には、いかにももどかしいように見えるが、案外その中でどんなことがあっても揺がない自分を静かに築き、控え目にでも自分をたしかに打ち出して行けるのでないだろうか、ということが、少しずつ会員の皆さんの心に定着して行っているのではないかと思っている。今年は「〇月の俳句」というコピーを会合の都度配って、写生を中心にした俳句のあり方を解説することを始めた。創作と併行して鑑賞が、自分を少しずつたしかに打ち出して行くことにつながると思うからである。

（牧野　自然）

よりよい文化協会へ
六〇年度総会

六十年度総会は、よりよい文化協会をめざし、四月十四日午後一時から、奈良市北部出張所会議室で一〇〇人が参加し開かれた。五十九年度事業、決算、会計報告のあと、講座、同好会の継続開催、会報「層富」の第二号発行、各種団体交流会など六十年度の事業、予算を決めた。総会後、「古代と現代」—ある歴史上の人物の人生観をめぐって—。網干善教会長が特別記念講演をした。

五十九年度事業報告

前年度末に於て、事務局長の永田喜一郎氏が急に退任されるという苦難の幕開けとなりました。氏は平城ニュータウン自治連合会文化委員長として、当文化協会の設立について中心的な役割りを果たされ、続いて初代事務局長として会の発展に尽力されて来ました。五十九年度は、会の重要な職務が氏に集中し、大へんなご苦労をおかけした結果であることを反省し、広報等の職務を分担して会の運営に当ることになりました。

網干会長が、歴史教養講座受講の皆さんに呼びかけて下さったことが契機となって、広報文書配布担当者の連絡網が整備されました。編集と会員名簿整理を大浦小枝子さんが引受けて下さった結果、会報は、文化祭特別号を含めて三号、ニュースは十一号発行することが出来ました。夏には、待望の会誌「層富」が大橋一二先生、内田和夫氏他の皆さんのご尽力で発刊されました。

第二回文化祭は、昨年に続いて平城高等学校郷土研究部、平城西公民館の協賛展示の他、新らしく平城ニュータウン教育懇談会の協賛展示、平城西中学校演劇部、同吹奏楽部の協賛出演をいただくことが出来ました。

新年祝賀会は、第二回目を迎え、今後恒例の行事となっていくと考えられますが、宣伝不足のため現在のところ各種団体の役員のみの親睦の行事のようになっていますので、次年度からは早くから「誰でも自由に参加出来る会」であることをPRすることが大切でしょう。

セミナーは、第八回より第十二回まで計五回行われ。その他に総会の時と文化祭の時の二回記念講演が行われました。内容は次の通りです。

▽ 総会記念講演　「亀虎古墳と高松塚の壁画」
関西大学教授　網干　善教

▽ 第八回セミナー「西域カシュガルへの旅あれこれ」
旅行写真家　永田喜一郎先生

▽ 第九回セミナー「木簡発掘のうら話」
奈良文化財研究所　鬼頭　清明先生

▽ 第十回セミナー　「音楽と短歌」
歌　人　左門　璃晃先生

▽ 文化祭記念講演「哲学するとはどういうことか」
橘女子大学助教授　確井　敏正先生

▽ 第十一回セミナー「成人病の予防について」
社会保険郡山総合病院長　澤田　恂先生

▽ 第十三回セミナー「石榴の詩（拓本のすすめ）」
ＮＨＫ拓本講師　内田　弘慈先生

新しい試みとしては、第一回各種団体交流会が開催され、網干会長が基調講演をされました。又、第一回新春カルタ会が行われました。

以上が、事業活動の概要ですが、前年度に比べて会員数は入退会差引きで五十六人の減となりました。

各講座・同好会は一部困難に直面していますが、凡そ軌道に乗り、着実な歩みを続けていますので、今後は会員数も漸増していくでしょう。但し、外国語講座のように月一回の頻度では実力がつかないので、前年度の中国語講座の場合など週二回という大へんなご尽力を下條新太郎先生は一年間も継続されました。その間援助する方途が全く見出せなかったことを反省しながらも、現在尚、よい知恵は出ておりません。その為に、今年度、久富本幸子先生（中国語）、高橋節子先生（フランス語）にも大へんなご苦労をかけてしまいました。

その他残された重要課題は少なくありませんが、次年度に向けて何卒会員の皆さんの叡知を傾注していただきたいと念願する次第です。

六十年度 役員名簿

会長　網干善教

副会長　大橋一二　理事
孝田有禅
松岡礼一

事務局長　梶野哲

次長　木庭和子

会計　林昭博

常任理事　大浦小枝子
筧裕
川口勇
鬼頭清明
此下亨
下條新太郎
高橋節子
田中幸夫
中村正雄
永田喜一郎
牧野春駒
宮川恵美子
山内梅乃
吉田篤史
浅田旭彦
内田和夫
太田豊臣
奥長生
皆藤るみ子
北川尚子
北村孫衛
北村雅子　監事
木村長子
久冨木幸子　参与
小西正安
高橋三千子
高松美枝子
橙修造
橙公榮
樋泉俶子
西島芳子
西村広彦
浜口光良
細田雅代
前川良雄
真鍋さとみ
光岡靖子
山元洋子
吉村惣五郎
吉本音市
渡辺亮斗
野村信治
山下良吉
左門璃晃
谷口直子

会　則

第一章　総　則

第一条　この協会は、平城ニュータウン文化協会という。

第二条　事務局は、平城西公民館に置く。

第二章　目的及び事業

第三条　会員の研究・創作発表・知識の交換並びに会員相互間及び他の文化団体との連絡提携の場となり、綜合文化に関する進歩普及をはかり、地域文化の発展に寄与することを目的とする。

第四条　前条の目的を達成するために、次の事業を行う。

一、講演会、研修会、展覧会、発表会、文化講座等の開催。

二、関連文化団体との連携及び協力。

三、研究の奨励及び研究業績の表彰。

四、会誌の発行。

五、その他、目的を達成するために必要な事業。

第三章　会　員

第五条　平城ニュータウンに在住又は勤務する者で、協会の目的に賛同する者とする。会員の種別は次のとおりとする。

一、正会員　年間会費一、〇〇〇円

但し、高校生五〇〇円

二、賛助会員　この協会の趣旨に賛同する者で、年間会費五、〇〇〇円以上納める個人又は団体とする。

第四章　役　員

第六条　協会には次の役員を置く。

会長一名、副会長三名、常任理事若干名、事務局長一名、事務局次長一名、会計一名、理事若干名、監事二名

第七条　理事は、正会員中より選出する。

二、会長、副会長、常任理事は理事の互選で定め、総会の承認を得る。

三、事務局長、事務局次長、会計は理事中よ

り会長がこれを選任し、総会の承認を得る。

四、監事は会員中より二名選出する。

第八条　会長は協会を代表する。

二、副会長は会長を補佐し、会長事故あるときは代行する。

三、理事は理事会を組織し、協会に関する事項を審議し執行する。

四、常任理事は理事会の決定に基づき業務遂行に当るとともに、総会で決議した事項を執行する。

五、事務局長は会務の遂行に関する理事会、常任理事会等の決議に基づき全般の事務連絡処理に当る。

六、事務局次長は事務局長を補佐する。

七、会計は会計事務を処理する。

八、監事は会計帳簿を監査し、通常総会において報告する。

第九条　顧問・参与を置くことができる。顧問・参与は理事会の同意を得て会長が委嘱する。

二、顧問・参与は会議に出席して意見を述べることができる。

第一〇条　役員の任期は二年とし、再任を妨げない。

二、補欠により選出された役員の任期は、前任者の残任期間とする。

三、役員はその任期満了後でも、後任者が就任するまで、なおその職務を行う。

第五章　会議

第一一条　理事会は必要に応じ会長が招集する。但し、理事の三分の一以上から会議の目的を示して請求のあったときは、理事会を招集しなければならない。

二、理事会の議長は、会長又は会長の指名する者とする。

三、理事会は、理事の二分の一以上出席しなければ議事を開き議決することができない。

四、理事会の議事は、出席理事の過半数をもって決し、可否同数のときは議長が決する。

第一二条　常任理事会は会長、副会長、常任理事、事務局長、会計によって構成し、必要に応じ会長が招集する。以下理事会に準ずる。

第一三条　通常総会は、毎年一回会長が招集する。

二、臨時総会は、理事会が必要と認めたとき会長が招集する。

三、総会の議長は、総会出席者の中から指名する。

四、総会の議事は出席者の過半数をもって決し、可否同数のときは議長が決する。

第一四条　次の事項は通常総会に提出して、その承認を受けなければならない。

一、事業報告及び収支決算

二、会計監査報告

三、事業計画及び収支予算

四、その他、理事会において必要と認めた事項

第六章　会　計

第一五条　経費は会費並びに補助金、寄付金、その他の収入による。

第一六条　会計年度は毎年四月一日に始まり、翌年三月三十一日に終る。

第七章　会則の変更

第一七条　この会則は、総会の議決を経なければ変更することができない。

第八章　補　則

第一八条　この会則施行についての細則は、理事会の議決を経て別に定める。

第一九条　この会則は、昭和五十八年二月二十七日から適用する。

59 年 度 活 動 日 誌

59年		
4.	22	'84年度総会
	29	第8回セミナー
5.	10	ニュース ①
	20	第2回大和路見学会
	27	第9回セミナー
6.	25	講座・同好会案内（コミュニティ高の原）
	26	ニュース ②
7.	1	第10回セミナー
		講座・同好会案内（平城新聞）
	22	ニュース ③
8.	6	会誌「層富」発刊
	20	ニュース ④
	25	常任理事会
	29	会報（第1号）
9.	7	文化祭実行委員会
	12	〃
	16	第1回各種団体交流会
10.	1	ニュース ⑤
		会報（文化祭特別号）
	21	文化祭開会式
10.21～23		展示（絵画・書・園芸）
16～28		〃(拓本・俳句・短歌・写真・園芸)
22～27		〃（手芸・人形）
26～30		協賛展示（教育懇談会）
10.29～11. 2		協賛展示（平城高校郷土研究部）
11. 1～30		菊花展
10.	28	第2回囲碁大会
		ニュース ⑥
11.	4	文化祭上演
	11	会費納入お願い文書配布
	21	会報（第2号）
	30	ニュース ⑦
12.	6	第11回セミナー
15～22		協賛展示（平城西公民館）
	23	ニュース ⑧
60年		
1.	6	第2回新年祝賀会
	8	第1回カルタ会
2.	6	ニュース ⑨
	16	第12回セミナー
3.	9	ニュース ⑩
	13	役 員 会
	17	常任理事会
	31	理事懇談会・役員会
4.		ニュース ⑪
	14	'85年度総会

平城ニュータウン文化協会講座・同好会　　59年度

記号	講座・同好会	担当者	電話	曜日・時間	会場
A	歴史教養講座 「古代天皇の系譜」	網干善教	㉑ 6510	第2火曜（10時～12時）	北部出張所会議室
B	古代史講座 「村のくらし都のくらし」	鬼頭清明	㉑ 2997	第4土曜日（14時～16時）	〃
C	源氏物語研究	浅田知里	㉑ 1258	（希望者は電話で申込む）	〃
D	木目込人形・押絵同好会	谷口直子	㉑ 3307	第1・3水曜（10時～12時半）	〃
E	人生を語る会	牧野自然	㉑ 1777	第2日曜（13時～15時）	平城院
F	中国語講座	久富本幸子	㉑ 5015	毎週月曜（15時～17時）	北部出張所会議室
G	囲碁同好会	中村正雄	㉑ 0106	毎日曜（13時～18時）	平城西公民館和室
H	読書会	大橋一二	㉑ 4501	第4日曜（14時～16時）	北部出張所会議室
I	星を見る会	此下　享	㉑ 3377	毎月最終土曜日 （19時～20時半）	北部出張所 会議室前
J	写真同好会	（梶野　哲）	㉑ 3295	（希望者は電話で申込む）	北部出張所会議室
K	詩吟の会	吉本音市	㉑ 5036	第1・2・3水曜（13時～15時）	〃
L	地酒を味わう会	吉田篤史	㉑ 3600	第2土曜（19時半～22時）	会場未定
M	園芸の会	岡田越子	㉑ 6155	第3日曜（13時～15時）	北部出張所会議室
N	拓本を楽しむ会	渡辺亮斗	㉑ 6817	第1日曜（10時～12時）	〃
O	アマチュア無線の会	浅田旭彦	㉑ 1258	（希望者は電話で申込む）	〃
P	絵画の会	筧　裕	㉑ 6295	毎週土曜（15時～17時）	〃
Q	公園を考える会	田中幸天	㉑ 1168	不定期（ポスター等で広報）	〃
R	ワープロ教室	野村信治	㉑ 1082	毎週火・金曜（13時～16時）	みどりの家会議室
S	大和路ビデオ鑑賞会	野村治樹	㉑ 1082	毎月1回（ポスター等で広報）	北部出張所会議室
T	音楽を楽しむ会	高橋三千子 宮崎孝明	㉑ 3650 ㉑ 3815	第3日曜（14時～16時） （初参加の方は電話下さい）	〃
U	俳句基礎講座	牧野春駒	㉑ 1777	第2土曜（14時～16時）	〃
V	短歌入門	大浦小枝子	㉑ 4651	第3火曜（13時半～16時） 指導　左門璃晃	〃
W	フォークギター講習会	奥　長生	㉑ 0046	（希望者は電話で申込む）	〃
X	コーラス【それいゆ】	西　絢子	㉑ 4844	毎週木曜（10時～12時） 指導　永見純子	平城西公民館
Y	「子どもの生活」研究会	加藤育生 北村雅子	㉑ 5223 ㉑ 0753	月1回 （希望者は電話する）	北部出張所会議室
Z	フランス語講座	髙橋節子	㉑ 8013	毎週木曜（10時～11時半）	〃

59 年 度 決 算 報 告

【収入の部】

項　目	予算額	収入額	差引増減	備　考
前年度繰越金	128,000	128,994	994	
会　費	560,000	373,000	△187,000	個人正会員 368人×1,000 団体会員 1 ×5,000
補助金	50,000	30,000	△ 20,000	自治連合会から補助
寄付金	100,000	106,000	6,000	篤志家よりの寄付金
雑収入	10,000	18,084	8,084	預金利子 その他
合　計	848,000	656,078	△191,922	

【支出の部】

項　目	予算額	支　出	差引増減	備　考
事業費	170,000	108,412	△ 61,588	講演会、研究会、展示など
助成費	80,000	0	△ 80,000	
会議費	60,000	17,374	△ 42,626	
広報費	260,000	235,800	△ 24,200	ニュース、会報など
事務費	88,000	40,628	△ 47,372	文房具、コピー代など
通信費	30,000	250	△ 29,750	7,190 雑費へ流用
渉外費	60,000	24,650	△ 35,350	渉外関係費
雑費	50,000	107,190	57,190	借用のテレビ、ビデオ修繕費など
予備費	50,000	0	△ 50,000	全額雑費に流用
合　計	848,000	534,304	△313,696	

656,078（収入額）－ 534,304（支出額）＝ 121,774（収支残額）≪翌年度へ繰越≫

59 年 度 会 計 監 査 報 告

出納帳、帳票書類等監査の結果正確なることを認めます。

59年 4 月 3 日

会計監査　野　村　信　治

太　田　豊　臣

'60 年度予算（案）

【収入の部】

項目	金額	備考
前年度繰越金	121,774	
会費	380,000	375人 × 1,000 = 375,000 団体1 × 5,000 = 5,000
補助金	50,000	自治連合会よりの補助金
寄付金	100,000	篤志家よりの寄付金
雑収入	8,226	預金利子　その他
合計	660,000	

【支出の部】

項目	金額	備考
事業費	110,000	講演会、研究会、展示会　等
助成費	50,000	講座・同好会などで特に助成を必要と認められるとき
会議費	30,000	
広報費	250,000	ニュース紙、会報など
事務費	80,000	文房具、コピー代など
通信費	10,000	郵送費、電話代など
渉外費	30,000	渉外関係費
雑費	50,000	
予備費	50,000	以上各項目に予見していない経費の支出を必要とするとき
合計	660,000	

六十年度事業計画

講演会予定　四月十四日　総　会　記念講演会(特)
五月　セミナー⑬
六月　〃　⑭
七月　〃　⑮
九月　〃　⑯
十月　文化祭　記念講演会(特)
十一月　セミナー⑰
二月　〃　⑱

二　会誌「層富」第二号発行（夏頃を目標として）。

三　会報発行（年度当初・夏前・文化祭前・年末の計四回）予定。

四　ニュース発行（毎月一回）予定。

五　第三回文化祭（十月～十一月）開催予定。

六　第二回各種団体交流会（九月頃）予定。

七　大和路見学会　第三回　事前学習会（五月二十五日）
〃　見　学　会（六月二日）
第四回　事前学習会（十　月　頃）

八　第三回新年祝賀会（一月五日）予定（従来通り地区各種団体との共催）

九　第二回新春かるた会（一月初旬）予定。

十　文化協会の宣伝ビラを全戸配布（五月初頃）など広報活動の充実。

十一　講座・同好会の新設計画予定。現講座・同好会への援助方法検討。

十二　その他

編集後記

「ボーッ」「ボーッ」古代の響きが聞こえてきます。それも目の不自由な方へのボランティア。人間愛を忘れかけた現代社会へ大きく吹き鳴らしたいものです。感動の「音の考古学」でした。

「一を以て之を貫く」―奈良筆づくり六十年、苅谷史峰は大仏開眼の日、清水管長の大きく円相を描く筆先を、どのような気持ちで眺めたでしょうか。「わたしは、まだ青二才や」郷土の教えは語り伝えられます。

目をとじて古代へ―木に思いを寄せて―いま目前で無雑作に切られる森や林の木。古代の木製品を、そっと筆で洗っている人にしか得られない、痛い想いと愛情が、ひしひしと伝わってきます。

（内田　和夫）

「層富」2号　編集委員

大橋　一二	神功3丁目20―1―6	⑦1―4501
内田　和夫	右京4丁目32―1―2	〃―1456
大浦小枝子	朱雀1丁目71―3―12	〃―4651
山元　洋子	右京3丁目44―12	〃―5138
真鍋さとみ	右京2丁目37　504号	〃―4534
木庭　和子	神功3丁目21―24	〃―3494
梶野　　哲	神功2丁目6―2―4	〃―3295

（順不同）